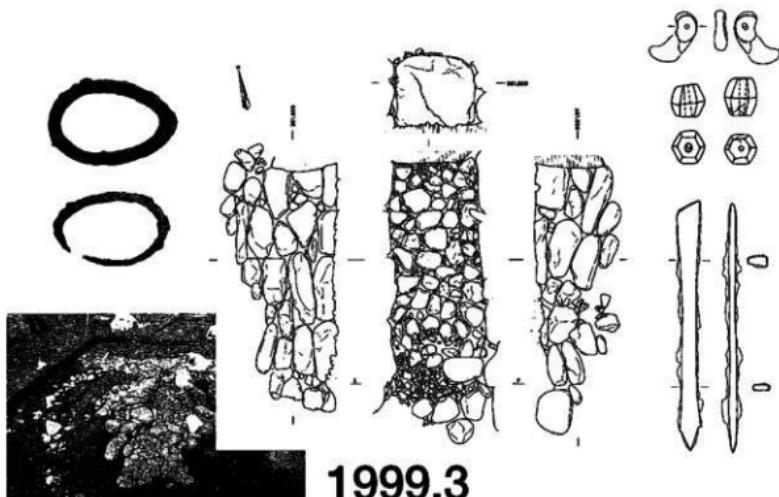


山梨県東八代郡一宮町

南 西 田 遺 跡
西 林 遺 跡
四 ツ 塚 古 墳 群

—山梨県「金川の森」造成に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書—



山梨県教育委員会
山梨県林政部

山梨県東八代郡一宮町

南 西 田 遺 跡
西 林 遺 跡
四 ツ 塚 古 墳 群

—山梨県「金川の森」造成に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書—

1999.3

山梨県教育委員会
山梨県林政部

卷頭図版



1.24号墳（奥）・25号墳（手前）



2.26号墳出土玉類



3.26号墳出土刀装具

4.26号墳出土鐵鎌

序

本書は、1996（平成7）年度に実施した、東八代郡一宮町に所在する南西田遺跡・西林遺跡・四ツ塚古墳群の発掘調査報告書であります。

今回の調査は、山梨県林政部が行う「金川の森」の森林公園造成に伴うもので、公園内に見られる遺跡のうち、3カ所の発掘調査を行ったほか、2カ所を案内板により文化財の存在を周知した上で埋設保存いたしましたことは、遺跡の存在を広く一般の方々に知っていただく上でも、非常に有意義なことであると存じます。

本遺跡群は、甲府盆地の東部を流れる金川両岸に分布しております。金川周辺は古墳時代から歴史時代にかけて遺跡の色濃く分布する地域として古くから知られており、以前から多数の遺跡が発掘調査を受けております。

南西田遺跡は、金川右岸に所在する平安時代の集落跡の東限にあたる地点で、対岸には「玉井郷長……」の墨書き土器を出土した大原遺跡が所在する所であります。今回遺物の出土は見られたものの、遺構は発見されませんでした。

西林遺跡は、金川右岸に所在する方形を基本形とした石積み遺構であります。大小合計28基が確認され、このうち6基の発掘調査を行い、その構造を明らかにしたものであります。他県の類例等から中近世における民間信仰の遺構ではないかと考えております。

四ツ塚古墳群は、金川左岸に位置し、5基の後期古墳が発掘調査されました。1975（昭和55）年の中央自動車道一宮・御坂インターチェンジ建設に伴って調査された22基の古墳の北側に隣接する同一古墳群であります。本県においては後期古墳の調査例は必ずしも多いとはいはず、今回の調査では貴重な資料を加えることができました。また、金川一帯の調査を行ったことで、この地域で営まれた遺跡の時代性を新たに再確認することができました。今回の調査の成果を、今後の研究の資料として御活用いただければ幸甚です。

末筆ながら調査にあたって御指導・御協力を賜った関係機関各位、並びに調査・整理に従事された方々に厚くお礼申し上げます。

1999年1月

山梨県埋蔵文化財センター
所長 大塚初重

例 言

1. 本書は、山梨県「金川の森」建設事業に先立ち山梨県埋蔵文化財センターが実施した東八代郡一宮町に所在する南西田遺跡・西林遺跡・四ツ塚古墳群の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は1995年（平成7年）5月10日から6月10日まで南西田遺跡、同年8月21日から31日まで西林遺跡、8月28日から12月12日まで四ツ塚古墳群がそれぞれ行われた。
3. 本書の執筆・編集は石神孝子が行った。
4. 卷頭のカラー写真は日本写真家協会会員塙原明生氏によるものである。また写真撮影は、遺構については森原明廣・石神孝子が、遺物については塙原明生氏が行った。
5. 本報告書にかかる出土品、記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
6. 発掘調査及び報告書作成にあたっては、関係諸機関・地元・多くの研究者の方々からご指導・御協力を賜った。厚く感謝申し上げる。

凡 例

1. 遺構・遺物の縮尺は原則として次の通りである。

南西田遺跡	遺構全体図 =1/80	遺物実測図 =1/3
西林遺跡	遺構図 =1/30	
四ツ塚古墳群	古墳平面図・断面図 =1/60	石室展開図 =1/30
	遺物実測図（玉類・鉄鎌・刀装具） =2/3	*ただし第17図1は1/3
	堤防状遺構平面図・断面図 =1/80	墳丘復元計画図 =1/80
2. 本文中必要によって●等のドット、スクリーントーンを用いたが、その指し示すものについては各文章中に説明してある。
3. 遺構断面中のレベルポイント部分にある数字は標高を表す。

目 次

序	
例言・凡例	1
目次	2
第1章 調査の経過と概要	4
第1節 調査に至る経緯	4
第2節 発掘調査の概要	4
第1項 発掘調査の経過	4
第2項 調査組織及び協力機関	5
第2章 環 境	6
第3章 南西田遺跡	8
第1節 遺跡の位置	8
第2節 平安時代の遺物	8
第4章 西林遺跡	11
第1節 遺跡の位置	11
第2節 遺構	11
(1) 石積み遺構	11
第5章 四ツ塚古墳群	14
第1節 分布調査について	14
第2節 古墳時代の遺構と遺物	17
(1) 23号墳	20
(2) 24号墳	23
(3) 25号墳	29
(4) 26号墳	30
(5) 27号墳	33
第3節 歴史時代の遺構と遺物	35
(1) 堤防状遺構	35
第6章 遺構の保護と保存方法	36
第7章 若干の考察	39
第1節 四ツ塚古墳群の築造年代	39
第2節 第26号墳出土玉類について	40
第8章 まとめ 一四ツ塚古墳群の提起する問題一	42

挿 図 目 次

第1図	金川の森公園内遺跡分布図	4
第2図	周辺遺跡分布図(S=25,000分の1)	7
第3図	調査区位置図	8
第4図	B・C区全体図・遺物分布図	9
第5図	出土遺物	10
第6図	石積み遺構分布図	11
第7図	第1号～第6号石積み遺構平面図・断面図	13
第8図	四ツ塚古墳群古墳分布図	14
第9図	23号墳平面図・断面図	15
第10図	23号墳石室展開図	16
第11図	23号墳出土遺物	17
第12図	24号墳平面図・断面図	18
第13図	24号墳石室展開図・閉塞部平面図・断面図	19
第14図	24号墳出土遺物	20
第15図	25号墳平面図・断面図	21～22
第16図	25号墳石室展開図・閉塞部平面図	23
第17図	25号墳出土遺物	24
第18図	26号墳平面図・断面図	25～26
第19図	26号墳石室展開図	27～28
第20図	26号墳閉塞部平面図・断面図	29
第21図	26号墳石室内遺物分布状況	30
第22図	26号墳出土遺物	31
第23図	27号墳平面図・断面図	32
第24図	27号墳出土遺物	32
第25図	27号墳石室展開図・断面図	33
第26図	第2次調査区古墳配置状況	34
第27図	堤防状遺構平面図・断面図	35
第28図	25号墳復元整備プラン	36

図 版 目 次

卷頭図版

1. 24号墳(奥)・25号墳(手前)
2. 26号墳出土玉類
3. 26号墳出土刀装具
4. 26号墳出土鐵鎌

図版

西林遺跡

1. 石積み遺構群近景
2. 3号石積み遺構
3. 2号石積み遺構完掘状況

南西田遺跡

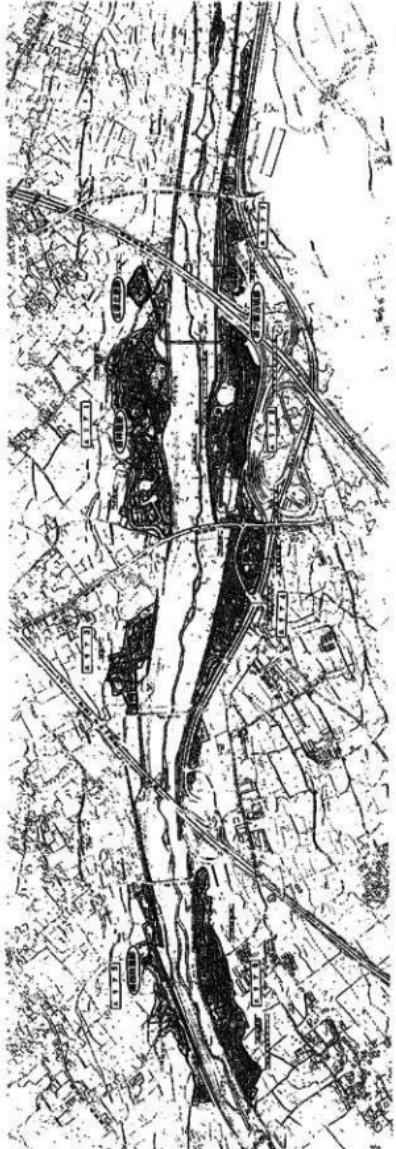
4. B区近景
5. B区完掘状況
6. C区完掘状況
7. B区作業風景
8. 出土遺物
9. A区整備状況
10. B・C区整備状況

四ツ塚古墳群

11. 23号墳石室完掘状況
12. 23号墳全景
13. 23号墳閉塞石周辺
14. 23号墳出土遺物
- 15.～17. 墓書土器「川勾」
18. 四ツ塚古墳群分布調査風景
19. 24号墳天井石崩落状況
20. 24号墳全景

21. 24号墳(西から)
22. 24号墳閉塞部
23. 24号墳出土遺物
24. 25号墳全景
25. 25号墳石室
26. 25号墳出土遺物(刀子)
27. 25号墳出土遺物
28. 墓書土器「廣」
29. 26号墳石室
30. 26号墳(北東から)
31. 26号墳閉塞部
32. 26号墳刀装具出土状況
33. 26号墳前庭部出土須恵器甕
34. 27号墳全景
35. 27号墳調査前状況
36. 27号墳側壁部
37. 38. 27号墳出土遺物
39. 墓書土器「西」
40. 堤防状遺構全景
41. 豆塚北遺跡試掘状況

第1章 調査の経過と概要



第1図 金川の森公園内遺跡分布図

第1節 調査に至る経緯

甲府盆地の東に連なる御坂山塊は幾筋もの川の源になっている。その一つに数えられる金川は、金川扇状地を形成しながらやがて笛吹川へ合流する。金川と笛吹川の合流点付近には、古墳時代後期から平安時代にかけて県内でも有数の遺跡の包蔵地となっているところである。

一方で東八代郡一宮町竹原田付近を流れる金川両岸は県民に親しまれる公園の造成が計画されていた。それに伴って1994年には甲府林務事務所により森林公園「金川の森」の造成が着手された。そのため、甲府林務事務所の委託を受けて県埋蔵文化財センターでは、1994年に試掘調査が行われた南西田遺跡、及び1995年には分布調査を行った四ツ塚古墳群、これらと併行して試掘調査を行った豆塚北遺跡、西林遺跡などで遺跡包蔵地を相次いで確認した。このため1995年(平成7年度)5月10日～6月10日まで「野鳥観察広場」に位置する南西田遺跡を、同年8月21日～31日まで「冒険遊び場広場」に位置する西林遺跡を、同年8月28日～12月12日までを「サイクリング広場」である四ツ塚古墳群のそれぞれ発掘調査を行った。また同年9月18・19両日で豆塚北遺跡の試掘調査を併行して行った。

第2節 発掘調査の概要

第1項 発掘調査の経過

南西田遺跡 本遺跡は東八代郡一宮町坪井字南西田1370-1他に所在する。金川右岸に位置し、試掘調査により駐車場建設予定地(A区)、東屋建設予定地(B区)、トイレ建設予定地(C区)で古墳時代後期から平安時代の遺構及び遺物が確認された。しかしA区については協議の結果、50cm以上盛土を施した上で埋設保存されることとなった。このため、B区・C区の対象面積100m²について発掘調査を実施した。B区・C区ともに金川に極めて近接しており、B区は約1m、C区は約1.5m程度の厚く堆積した砂礫層に覆われていた。調査の結果、B区では金川の流路がこの地区まで延びていたらしく、現流路のある北側へ階段状に傾斜する様子が確認できた。C区では厚く堆積する砂礫の中から古墳時代後期及び平安時代の土器片が出土したが、遺構は存在しなかった。

西林遺跡 本遺跡は東八代郡一宮町国分字西林1082他に所在する。金川右岸に位置し、金川の所在する南東側から北西側へかけて堤防上の小山が連続する地形である。これら小山状の谷部分から小山の立ち上がり部分にかけ

て方形で河原石を3段から5段程度積み上げた石積み遺構が大小約28基確認された。このうち「芝生広場」として造成される南西部分の1号～6号石積み遺構については発掘調査を行い、遺構の解体を行った。石積み遺構の下層部には掘り込み等の遺構は見られず、遺物も出土しなかった。

豆塚北遺跡 本遺跡は東八代郡国分寺一宮町国分字猪ノ前1269-1他に所在する。金川右岸に位置し、パーゴルフ練習場予定地として埋設保存されるため、試掘調査により遺跡の有無についてのみの確認調査となった。調査の結果、縄文時代後晚期及び平安時代の遺物が出土した。

四ツ塚古墳群 本遺跡は東八代郡一宮町国分字猪ノ前1269-1他に所在する。金川左岸に位置し、「サイクリング広場」としてサイクリング道が建設されることになっていたため、道部分にかかる遺構について発掘調査することになった。この地はかつて四ツ塚古墳群第1次発掘調査において22基の後期古墳が確認された一宮・御坂インターチェンジの北側に位置しており、この地にもこれらと同様の性格の遺構が広く分布することが推測されたため、「サイクリング広場」内について遺構分布調査を行うことになった。分布調査は平成7年6月22日から4日間行われ、その結果、古墳時代後期の古墳と思われる遺構を合計38基確認した。このうち23号墳は既に天井石をすべて失った横穴式石室で、側壁の一部も崩壊している。当該期の遺物はほとんど残されていなかった。24・25号墳は近接しており、同一支群に属するものと考えられる。24号墳は比較的遺存状況が良好であった。調査を行った5基の古墳の中では唯一周溝を持ち、前庭部には陸橋部が施される。前庭部からは須恵器甕が出土した。25号墳は24号墳と比較して遺存状況は良好とはいえないが、石室内より刀子が出土した。26・27号墳は中央自動車道を挟んだ「桜広場」に所在する。26号墳は調査した中で最も規模が大きく、前庭部には須恵器甕破片がまとまって出土した。さらに副葬品の残存状況は良好であり、人骨片の他、首飾りとして使用されたと思われる勾玉や水晶製の切子玉、ガラス小玉等、また刀装具や鉄鎌等が出土した。27号墳は他の4基とはやや主軸を異にする（第26図参照）。石室内からは平安時代の杯が唯一出土したのみで、他には何も出土しなかった。

また24・25号墳の西側には金川の堤防状遺構が所在する。建設時期は不明だが、金川の治水史を考える上で重要な遺構である。

第2項 調査組織及び協力機関

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者 森原明廣（山梨県埋蔵文化財センター主任・文化財主事 現学術文化財課）

石神孝子（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事）

作業員 赤岡牧・小池孝男・小池昭江・山下いよ子・渡辺金重・赤尾邦夫・赤尾とら子・大塚昭六・田辺秋太郎・上島十郎・北村さつき・望月篤子・熊谷真樹子・花形正男・竹内孝次郎・岩間佳子・岩間友子・菊島慶子・浅野由美子・岩崎満佐子・林紀子

整理員 長田久江・長田てる美

協力者・機関 猪股喜彦・瀬田正明（一宮町教育委員会）・田中大輔（若草町教育委員会）・畠大介・

柳原功一（帝京大学山梨文化財研究所）・清水博（故人・櫛形町教育委員会）・

土生田純之（専修大学）・田尾誠敏（東海大学）・望月和幸（御坂町教育委員会）

第2章 環 境

遺跡の所在する山梨県東八代郡一宮町は、甲府盆地の南東に位置する。この地には東西に御坂山塊が連なり、そこからは京戸川や金川、大石川等が流れ出し、それぞれ扇状地を形成するなど起伏に富んだ地形となっている。これらの一つである金川は源流から約18kmの流路を測り、東八代郡石和町と一宮町の町境で笛吹川へ合流する。笛吹川によって形成された扇状地上に小扇状地である金川扇状地が展開する、複合扇状地を形成している。

これら扇状地扇頂部には旧石器時代～縄文時代にわたる遺跡が立地する。京戸川扇状地扇頂部には国内最多の1,116点の土偶を出土した縄文時代中期を中心とする大集落跡である駿迦堂遺跡群が、また金川扇状地扇頂部には同じく縄文時代前・中期に位置づけられる桂野遺跡群が展開する。この後、弥生時代以降の遺跡は標高を下った扇状地内部に分布する傾向があり、やがて奈良・平安時代にはこれまでとは比較にならないほどの数の遺跡が所在する。

今回発掘調査を行った四ツ塚古墳群についても、このように扇央部に立地する遺跡群の一つであるといえる。四ツ塚古墳群は金川左岸に南北に長く位置する古墳時代後期の群集墳である。中央自動車道一宮・御坂インターチェンジ建設時には22基が発掘調査され、今回はこれらと同グループであると思われる5基が新たに調査された。四ツ塚古墳群の対岸の金川右岸には、八角形墳である経塚古墳や国分墓地古墳群(17)・塩田古墳群等が所在する。また四ツ塚古墳群の南東には長田古墳群(16)が所在し、1989年に始まった調査ではT字型の横穴式石室をもつ古墳をはじめとする合計35基の後期古墳が発見された。また御坂町には錦生古墳群等の当該期の古墳が所在するなど、後期には金川を中心に多数の古墳が築造された。一方1979年に中央自動車道建設に伴って発掘調査された東八代郡御坂町の二之宮・姥塚遺跡(5・6)からは、弥生時代～平安時代の大集落が検出された。このうち古墳時代前期後半から中期前半の遺構は希薄であり、遺物も多いとはいえない。しかし中期後半から後期の遺構は前時代より幾分数が多く、そこから出土した資料は当該期の土器様相をかなり明らかにしている。この時期、集落には5世紀後半になって大陸より渡来した須恵器がもたらされるなど、最新鋭の文物を取り入れられていたことも明らかになっている。この大集落の北側には県内では最大規模の横穴式石室を持つ姥塚古墳が隣接する。姥塚古墳は二之宮・姥塚の集落を治めた権力者の墓と想定され、金川付近に位置する群集墳は二之宮・姥塚遺跡を含むこの地の集落で生活した人々の墓であると推測されている。ただ、この集落跡で生活する6世紀後半以前の人々はいったいどこに葬られていたのか、なぜ金川流域に群集墳が営まれるようになったのかが問題点としてあげられる。

金川扇状地上では奈良・平安時代になって爆発的に遺跡が増加したことは、前述したとおりである。金川左岸には国分寺(14)や国分尼寺(13)をはじめとして当該期の遺跡が多数所在し、古くから盛んに発掘調査が行われた地域でもある。近年においても本調査区の対岸に位置する「玉井郷長……」の墨書き土器を出土し、玉井郷の位置を確定させた大原遺跡(7)や多数の墨書き土器を出土した狐原遺跡(8)などその成果は著しいものがある。

今回の発掘調査区は、1997年に南西田遺跡発掘調査団によって発掘調査の行われた南西田遺跡(2)に隣接する。南西田遺跡は9世紀前半から10世紀後半の住居跡53軒等が検出され、また条里に関係する溝なども出土している。また現在町道として浅間神社の北側を石和方面へ走る道路は、古くから「御幸道(みゆきみち)」と呼ばれ、甲府方面へ向かう主要道であったといわれている。この道路沿いには、当該期の遺跡の他にも多数の神社・仏閣が所在し、満願寺には平安時代に製作されたと伝承の残る千手觀音像が安置されている。

中世には県内でも数少ない屋敷跡等が発見された西田町遺跡(18)が所在するなど、奈良・平安時代を過ぎてもなお、この地が重要な地域であったことが物語られている。

このように、古墳時代後期には金川扇状地上にあって、墳墓と集落が展開されることや、奈良・平安時代に向かうに従って次第に分布が広範囲になっていくことが示されるのである。

【参考文献】

- 小林広和ほか 1985 「四ツ塚古墳群」山梨県教育委員会
坂本美夫ほか 1987 「二之宮遺跡」山梨県教育委員会
末木 健ほか 1987 「姥塚遺跡・姥塚無名塚」山梨県教育委員会
猪股喜彦ほか 1990 「大原遺跡調査外報」一宮町教育委員会ほか
森原明廣ほか 1996 「狐原遺跡」山梨県教育委員会
柳原功一ほか 1997 「西田町遺跡調査報告書」一宮町文化財調査報告第23集 西田町遺跡発掘調査団ほか
中山千恵ほか 1998 「南西田遺跡調査報告書」一宮町文化財調査報告第26集 一宮町遺跡調査会ほか
坂本美夫 1999 「姥塚古墳の被葬者像」「季刊考古学』第68号 雄山閣出版



- 1.四ツ塚古墳群 2.南西田遺跡 3.西林遺跡 4.姥塚古墳 5.二之宮遺跡 6.姥塚遺跡 7.大原遺跡 8.狐原遺跡
9.筑前原遺跡 10.鞍掛・清水遺跡 11.矢倉遺跡 12.松原遺跡 13.甲斐国分尼寺跡 14.甲斐国分寺跡
15.経塚古墳 16.長田古墳群 17.国分築地古墳群 18.西田町遺跡

第2図 周辺遺跡分布図 (S = 25,000 分の1)

第3章 南西田遺跡

第1節 遺跡の位置

本調査区は金川の右岸に立地し、標高300.00m付近に所在する。金川は本調査区から約11kmほど下流へくだった地点で笛吹川へ注ぐ。本調査区のすぐ東側には南西田遺跡が所在し、平成9年度に南西田遺跡発掘調査団によって行われた発掘調査では、平安時代の住居跡53軒等が確認されている。また金川対岸には「玉井郷長……」の墨書き器を出土した平安時代の集落跡である大原遺跡も所在する。

本調査区は「金川の森」公園内の最も北西側に所在する「観察広場」内に位置する。当初、A区（駐車場建設予定地）・B区（東屋建設予定地）・C区（公衆トイレ建設予定地）の3地点について発掘調査を行う予定であったが、A区については盛土を施すことで、埋設保存することになった（第6章第1節南西田遺跡の保存参考）。そのため、B区・C区のみ発掘調査を行った。

第2節 平安時代の遺物

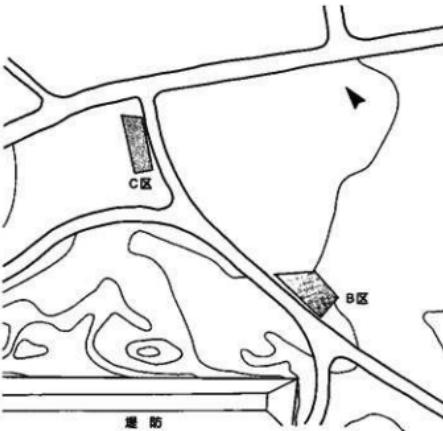
本調査区では金川流域に近接していることもあり、度重なる増水により川幅が拡大された痕跡が認められた。そのため、本調査区には住居跡等の遺構は存在しないことが確認できた。しかし南西田遺跡と近接することからここから流れ込んだと思われる当該期の遺物が出土した。以下にそれらを示すこととする。

〈B区〉 東屋建設予定地である。金川に沿うように立地する。平成9年度に発掘調査の行われた南西田遺跡の集落跡の東端に位置すると思われる。遺構は全く確認されなかったが、川の流れによって削り取られたのであろうか、金川に向かって階段状に下がっていくような地形を呈する。覆土は何層にも堆積する砂質土で、地山付近からは多数の平安時代の土器片が出土した。とくに調査区の中でも標高の低い東側部分からは、その落ち込みに土器片の集中が見られた。また、調査区の中でも標高の高い西側部分の台地上では、焼土跡を確認した。

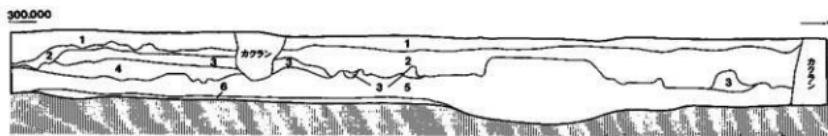
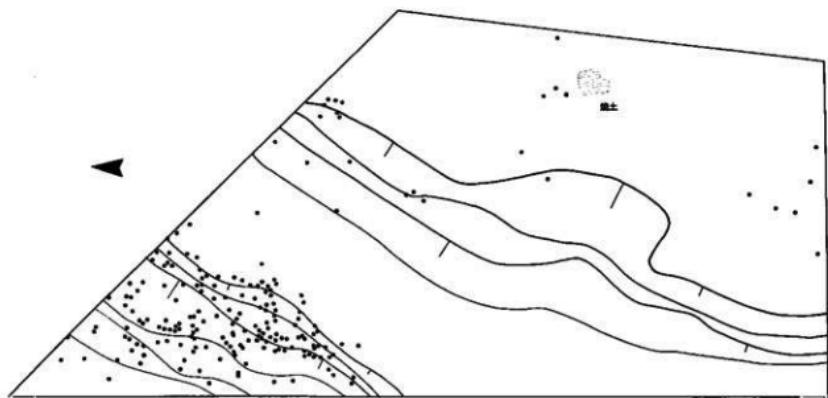
遺物はいずれも小さく、摩耗しており接合できるものはほとんど存在しなかった。その中でもかろうじて遺物の年代を推し量ることのできる遺物を図示する。第5図1は甕底部である。内面には若干ハケが見られ、底部には木葉痕が認められる。胎土は粗く、金雲母を多く、小礫も含む。2は甕口縁部である。やはり胎土は粗く、金雲母を含む。3は羽釜である。胎土は若干密であり、小礫を多く含む。内面をハケにより調整している。4から13は杯である。内面に暗文の見られるものはない。底部は糸切り痕が観察できる。14から16は高台杯底部である。底部のみで全体を知ることのできるものは存在しない。17は緑釉陶器である。瓶の胴部であると思われる。

〈C区〉 トイレ建設予定地である。B区より若干西側に、南北に長く位置する。表土より約2mほど掘り下げた砂礫層より多数の摩耗が進んだ古墳時代後期及び平安時代の遺物を確認した。しかし当該期に帰属する遺構は確認できなかつた。

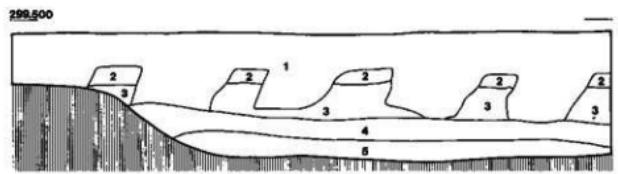
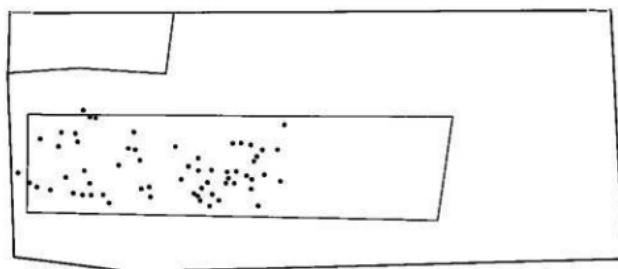
ここではかろうじて図示することのできる遺物4点を示す。18から21は平安時代に位置づけることができるものである。18・19は甕口縁部である。18の口縁部は形骸化が進み、明確な屈曲が見られない。20は高台杯である。胎土は密であるが小礫を含んでいる。21は須恵器甕の頸部から胴部である。外面はタタキにより調整されている。



第3図 調査区位置図

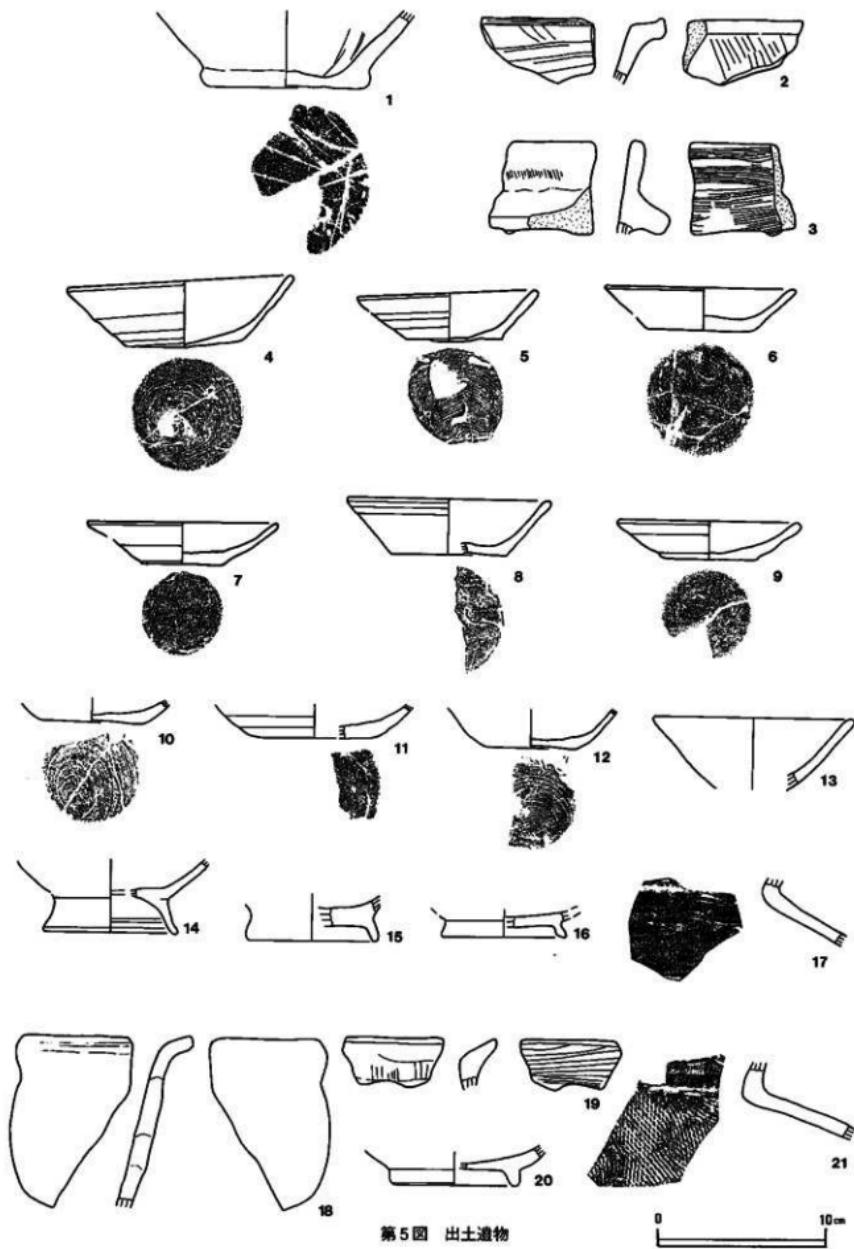


1. 耕作上層
2. 河系褐色砂質層 しまりは弱いが堅である。若干の弱い砂質層
3. 茶褐色土層 粘性・しまりは弱い。遺物を含む。
4. 河系褐色土層 しまりは強め。堅である。若干遺物を含む。
5. 茶褐色土層 粘性でよくくしまっている。炭化物・後土粒子混入。遺物を含む。
6. 地山層



1. 河系褐色砂質層 しまりは弱い。日本の弱い白砂質
2. 河系褐色砂質層 しまりは弱いが堅である。若干の弱い砂質層
3. 茶褐色土層 しまりは強め。小石・貝殻を含めて堅い。遺物を含む。
4. 地山層 早水から人頭大の礫を多く含む。

第4図 B・C区全体図・遺物分布図



第5図 出土遺物

第4章 西林遺跡

第1節 遺跡の位置

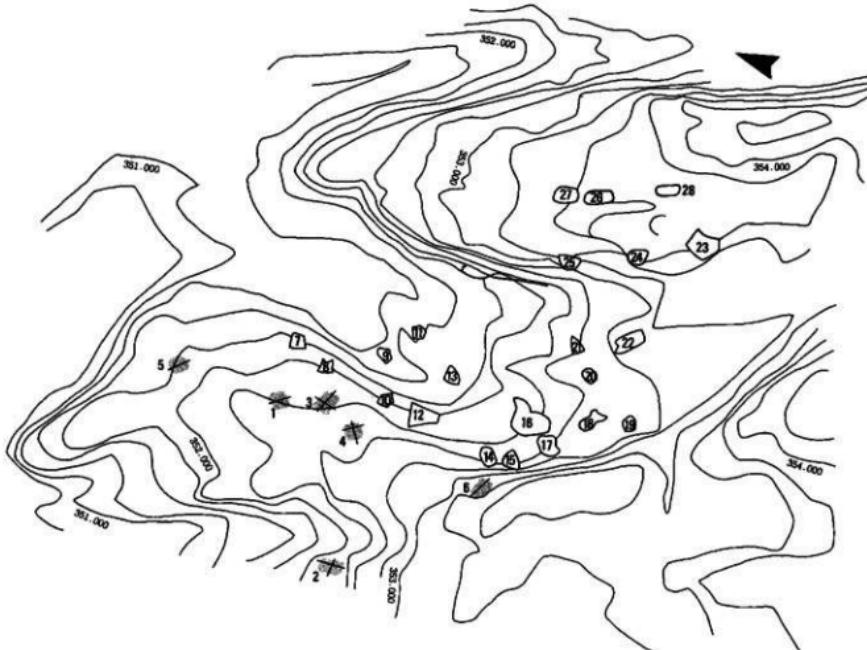
本調査区は金川左岸に位置し、標高352m前後を測る。本調査区の所在地点は、「金川の森」公園内の「冒険遊び場」及び「野の花広場」にまたがって位置している（第1図）。調査区は現在の金川の流路にほど近く、東側80m地点に金川が流れる。また本地点より直線距離にして西側200m付近には八角形壇として話題になった経塚古墳が所在する。本調査区は金川に沿うように、南北に長く土手状の小山がいくつも所在しており、この小山と小山に挟まれた谷部に調査対象となった石積み遺構が集中して存在していた。

第2節 遺構

(1) 石積み遺構

本調査区では28基の石積み遺構が確認された。基本的にはいずれも人頭大およびそれ以上の疊が3段から4段ほど積まれており、疊と疊の間には拳大前後の疊が隙間を埋めるような形で充填されている。これらを詳細に観察した結果、それぞれの石積み遺構ごとに製作工程や使用する疊等が微妙に異なっていることを知ることができた。調査を行った石積み遺構のうち、最大のもので長径2.1m、短径2.09m、高さ0.6m、最小のものでも長径1.38m、短径1.1m、高さ0.3mを測る。平面形態は方形もしくは長方形を基本形とするが、この限りではなく三角形に近いものや不整形のものなど、様々なものが見られる。さらに断面は山状を呈するもの、方形を呈するものなどが存在する。

このうち第1号石積みから第6号石積みまでの6基については、「芝生広場」造成のため実測及び発掘調査



第6図 石積み遺構分布図

を行った。この調査により石積み遺構の帰属年代やどのような性格の遺構であるのかを確認しようと試みたが、これらに伴う遺物は全く確認することはできなかった。また石積みを取り除いた下層部分についても、掘り込み等の遺構は確認できなかった。このためこれらの石積み遺構がいったい、いつどのような目的で造られたのかは今後類例の増加を待ちたい。次に発掘調査を行った第1号から第6号の石積み遺構について詳細を述べたい。

第1号石積み遺構 本石積み遺構は調査区の北東で、すぐ南側の3号石積み遺構とは接するような状態で位置する。石積み遺構の中では比較的大型であるが、使用する礫は拳大から人頭大の小振りなものが多く見られる。規模は南北2.11m、東西2.09m、最大高0.6mを測り、形状は不整四角形を呈する。3段程度の礫が積まれておらず、間には比較的密に小礫が充填されている。石積み遺構を乗せる地山は目の粗い砂質土で、掘り込み等の遺構は所在しなかった。

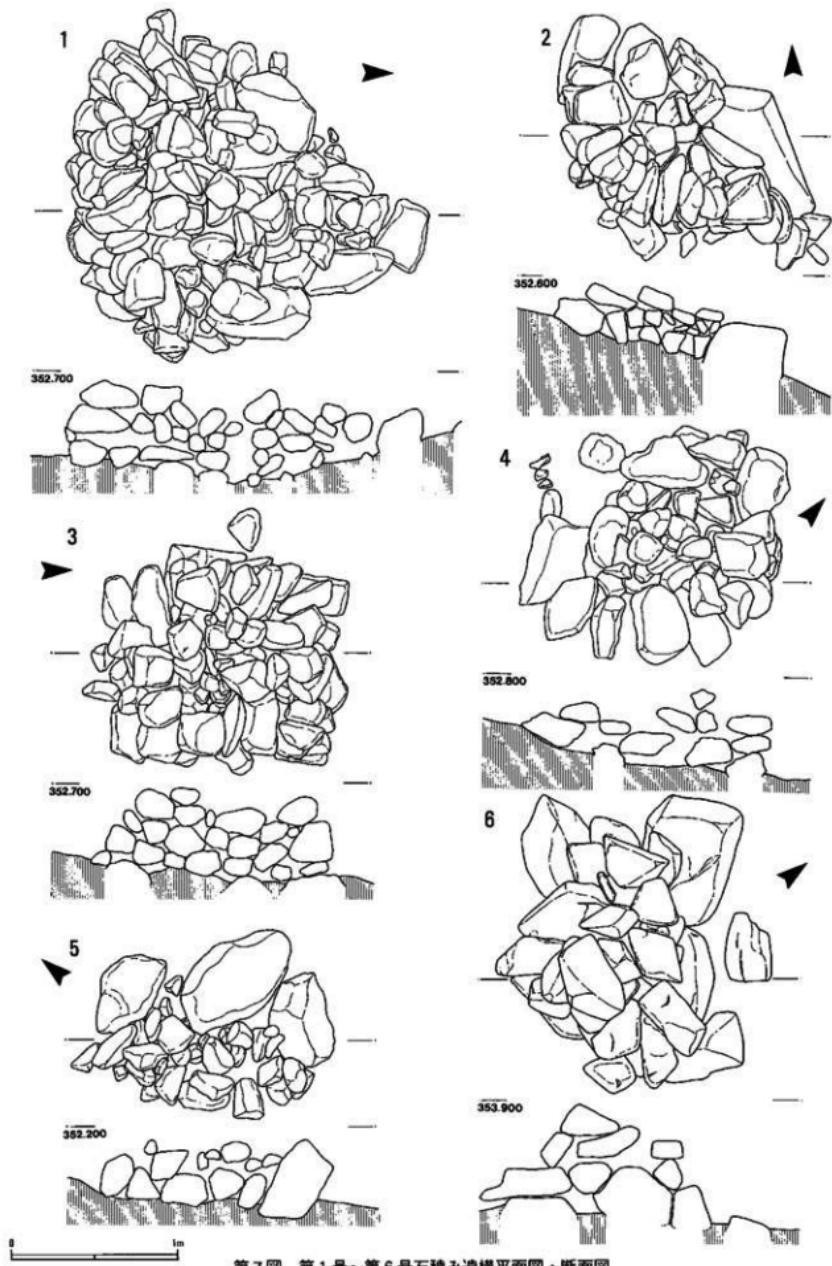
第2号石積み遺構 本石積み遺構は調査区の最も東側に位置する。不整形を呈し、南北1.33m、東西1.48m、最大高0.3mを測る。石積み遺構の中では小型で、使用する礫は人頭大より若干小さいものが目立ち、石積みも低い。東から西へ傾斜する斜面上に構築されており、最も最下部に位置する礫は、地山にもとから含まれていた可能性が高い。そのためこの礫を中心にして構築されているものである。

第3号石積み遺構 調査区の北西寄りで、中央谷部よりやや上がった小山部の中腹に所在する。ほぼ正方形を呈し、規模は南北1.45m、東西1.3m、最大高0.55mを測り、3段の石積みが施される。外面には人頭大前後の礫が用いられ、内側に拳大の礫がかなり密に充填されている。最下層にはもとから地山に含まれていたと思われる表面が平坦である礫が複数位置していた。

第4号石積み遺構 本石積み遺構は3号石積みのやや北東寄りに位置する。若干東から西へ緩やかに下る傾斜地に所在する。不整であるが正方形を呈し、規模は南北1.41m、東西1.49m、最大高0.45mを測る。他の石積み遺構に比べて人頭大の礫を荒く積み、礫と礫の間はほとんど充填していない。そのため礫と礫の間には空間が目立つ。地山は粗い砂質土で、人頭大の礫を含む。そのため基底部の礫はもとと地山面に含まれていたものと思われる。石積み遺構の下層部には掘り込み等の遺構は所在せず、遺物の出土も見られなかった。

第5号石積み遺構 調査区の最も北側に単独で所在する。南から北へ緩やかに傾く傾斜地に立地する。不整形を呈しており、規模は長径1.38m、短径0.85m、最大高0.35mを測る。巨礫が多く含んでおり、これらを中心として石積みが構築されており、間に拳大の礫が充填されている。遺構の下層部は砂質土であり、石積み遺構を構成する礫を含む。

第6号石積み遺構 調査区の南東側に所在する。すぐ西側には14・15号石積み遺構が所在しており、本石積み遺構はこれらより一段高い小山部の中腹部分に位置する。極めて不整形を呈し、規模は長径1.64m、短径1.21m、最大高0.68mを測る。中心部に向かって小山状に高くなっている、人頭大の礫を中心に利用している。間を充填する礫はそれほど見られない。地山面にはやはり人頭大の礫が比較的数多く含まれており、石積み遺構基底部はこれらの礫により構成される。



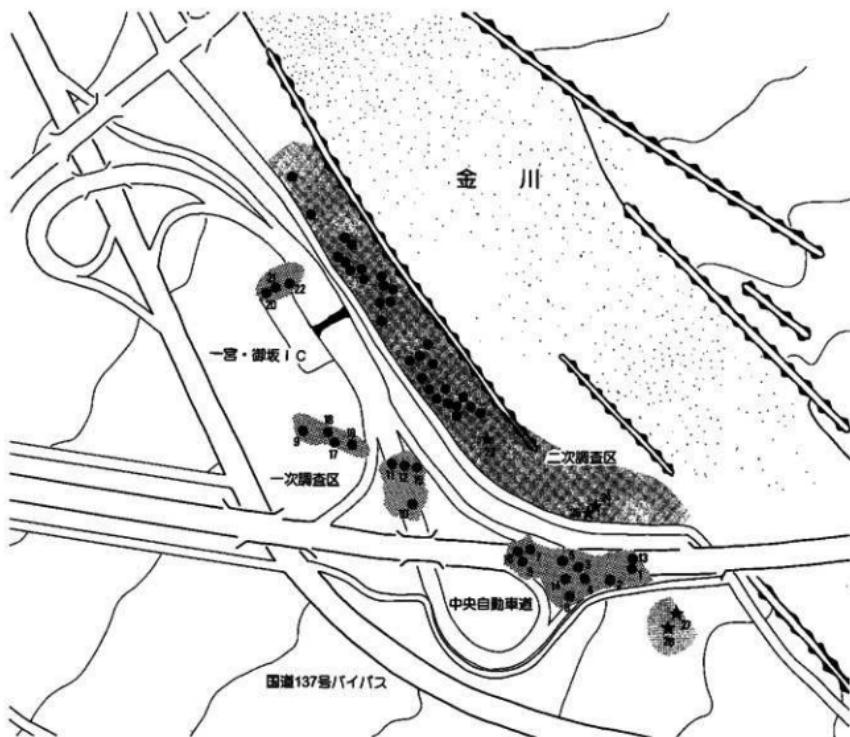
第7図 第1号～第6号石積み造構平面図・断面図

第5章 四ツ塚古墳群

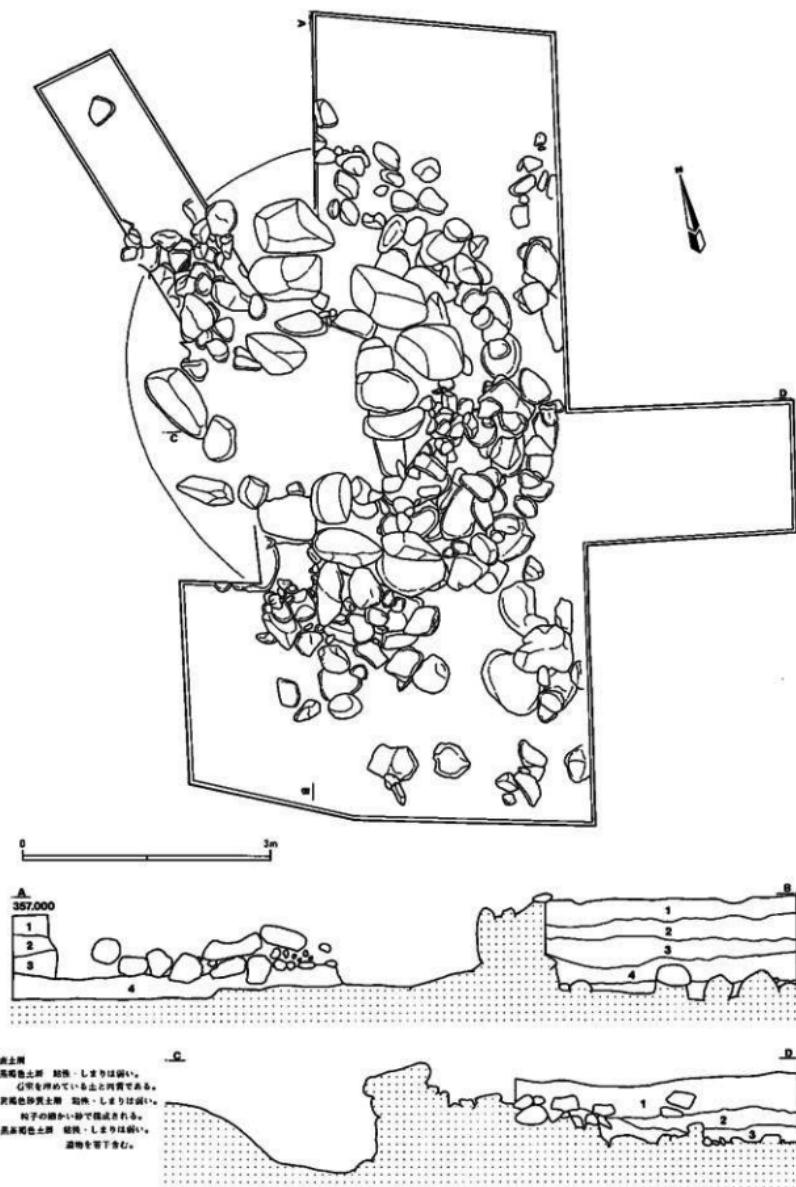
第1節 分布調査について

本調査区は金川左岸に位置し、「金川の森」内の「サイクリング広場」地区に所在する。当地は1975年(昭和55年)に中央自動車道一宮・御坂インターチェンジ建設時に発掘調査を受け、22基の後期古墳が確認された四ツ塚古墳群のすぐ東側に位置しており、公園造成当初これらと同一群と思われる古墳が多数存在していた。そのため、サイクリングロード造成にあたって、コース予定地内で発掘調査の必要な箇所を確認するために古墳分布調査を実施した。当該地は金川に沿って南西から北東へ緩やかに傾斜しており、これらの斜面上には多数の古墳が分布していた。これらはいずれも5m~10m前後の規模を測り、石積みのマウンドが認められるもの、石室の天井石および石室を構成する礫等が観察できるものなどが存在した。これらを清掃しながら1基ずつ確認調査を行い、古墳である可能性が高いものについては便宜上仮ナンバーを付した。その結果「サイクリング広場」内で確認した古墳は約36基を数えるに至った。

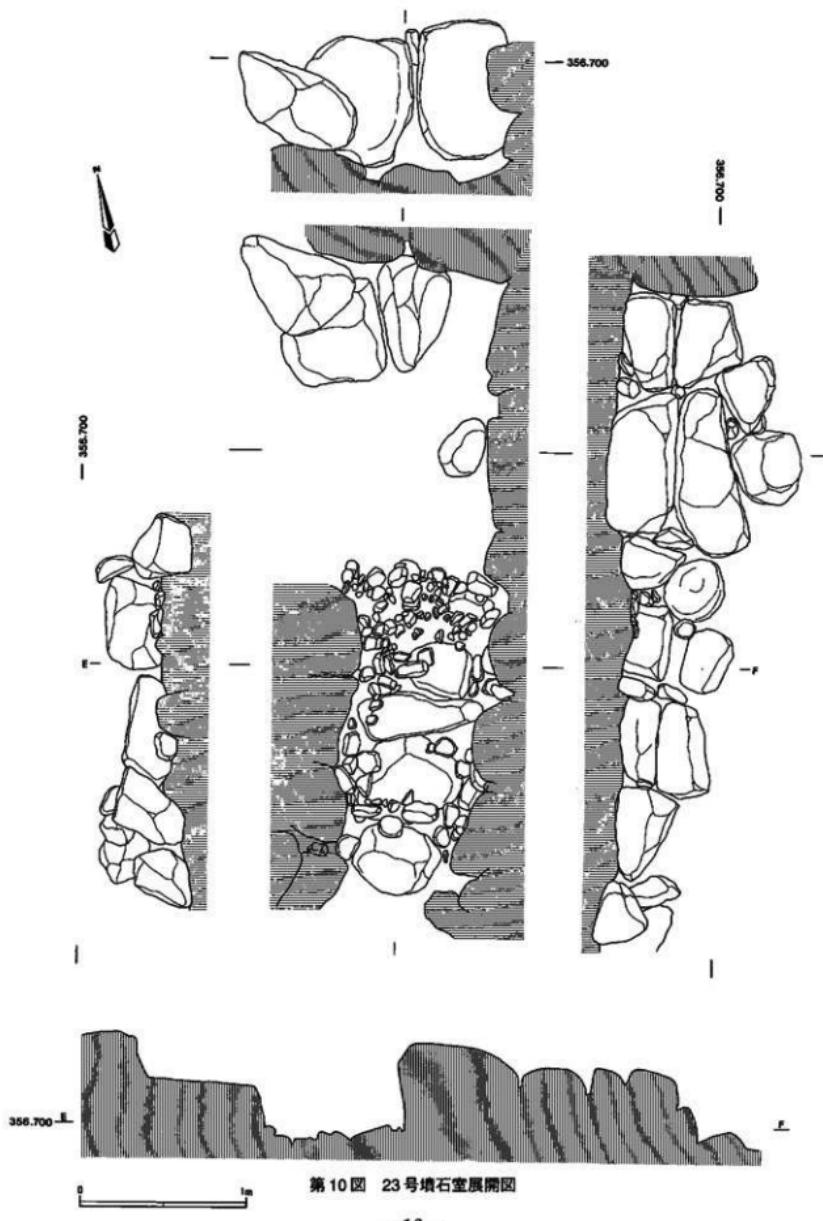
このように古墳である可能性が高かった36基のうち、区域の最南西に位置する2基(仮ナンバー34・35号墳)についてはサイクリングロードの路線上に位置するため、発掘調査を行った。また確認調査時にすでに石室の露出していた23号墳(仮ナンバー34号墳)については清掃を目的とする発掘調査を行った。

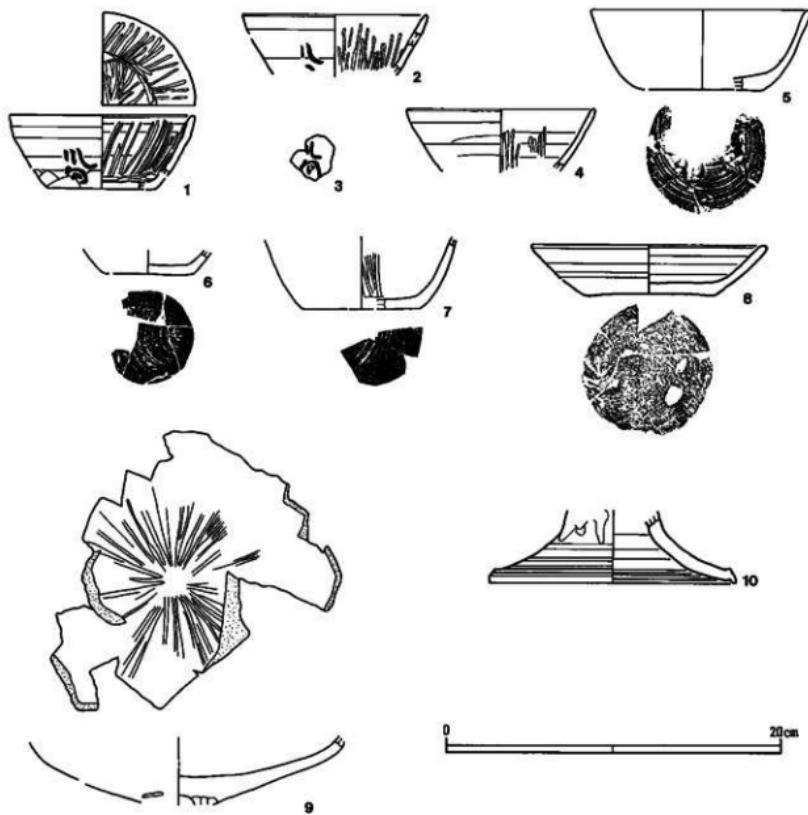


第8図 四ツ塚古墳群古墳分布図



第9図 23号墳平面図・断面図





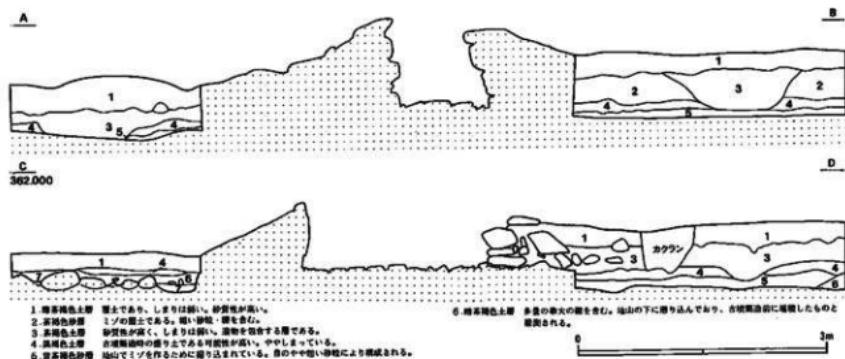
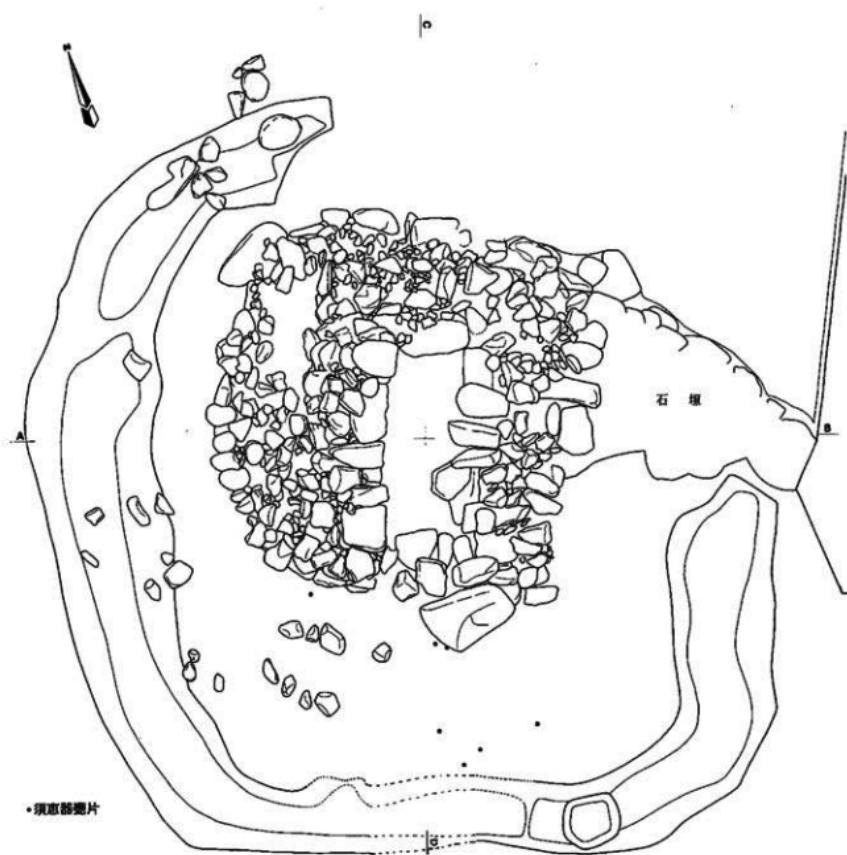
第11図 23号墳出土遺物

発掘調査の結果、サイクリングロード路線上に位置するものの2基はいずれも古墳で、石室の遺存状況も良好であった。またこれらの古墳調査時に、中央自動車道を挟んだ南西側の「桜広場」においても2基の古墳が確認された。このためこれらについても発掘調査を実施した。

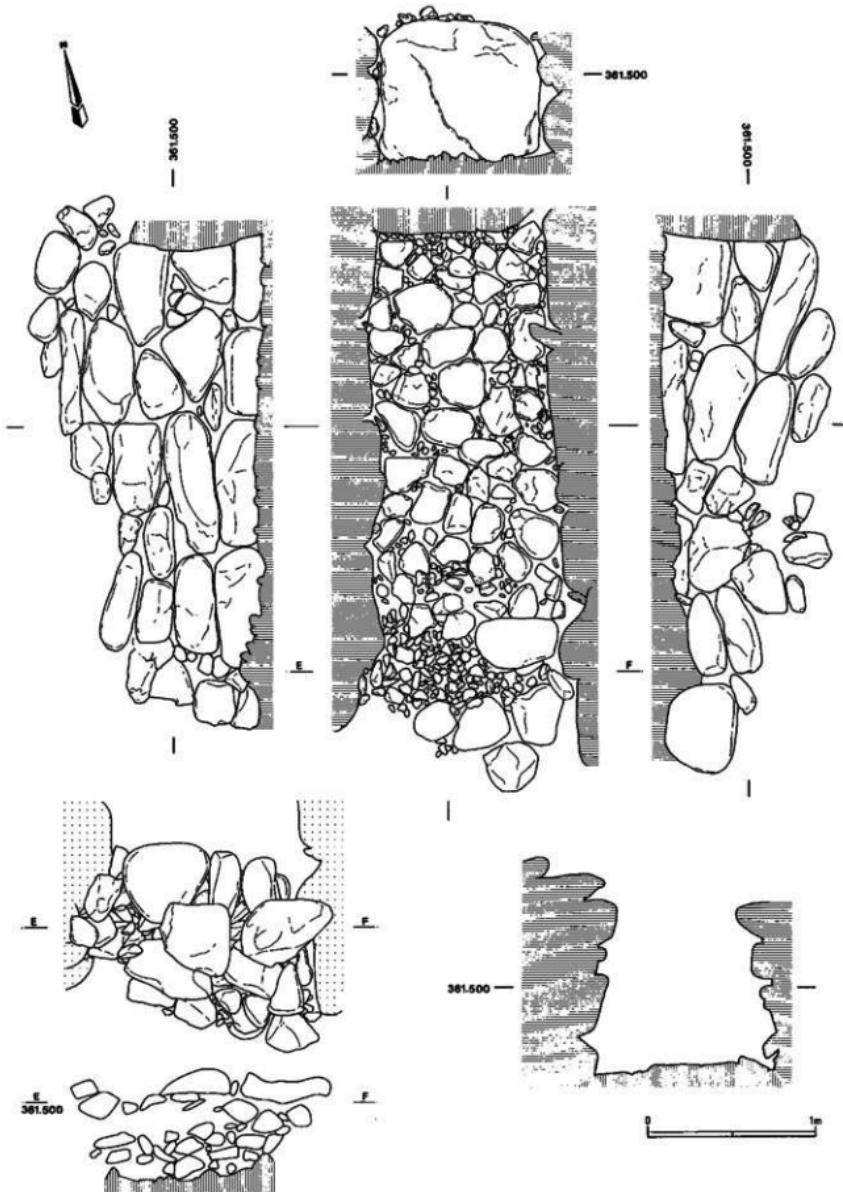
第2節 古墳時代の遺構と遺物

上記したように今回は5基の古墳の発掘調査を実施した。これらはいずれも1975年に発掘調査を受けた四ツ塚古墳群(第1次調査)に近接するものである。第1次調査では22基の後期古墳が確認された。そこで今回はこれらの古墳と同じ群集墳を構成するものと考え、便宜的に続き番号を付すものとする。

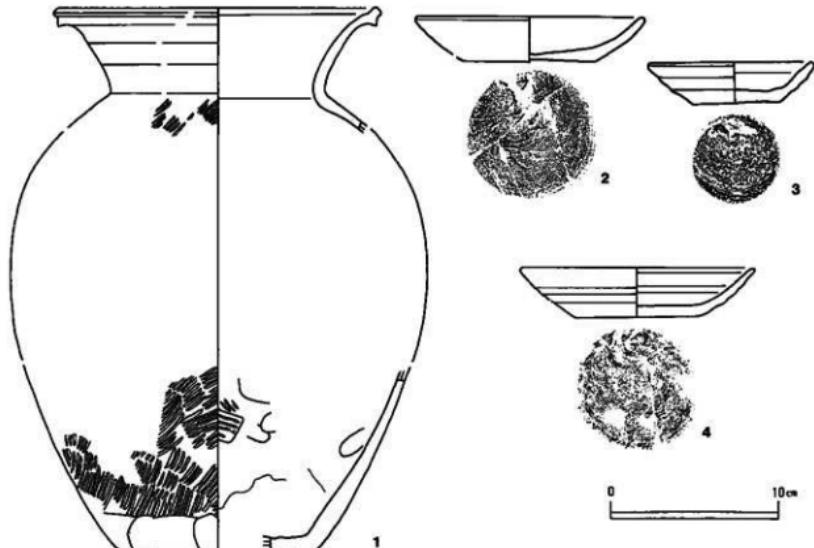
調査を行った23~25号墳は中央自動車道の北側に位置し、主軸を北、あるいは北北東に採る。24・25号墳は隣接するが、24号墳には周溝が巡るなど、墳丘形態に若干の差異を見いだすことができる。これらは23号墳とやや離れているため23号墳とは別の支群であり、あるいは一次調査時のA支群に属するものかもしれない。さらに23号墳はやや単独で所在するような觀がある。調査時には石室は表土層より下層から検出され、他の古墳と異なり若干標高の低い場所を選地して築造されたことがわかる。一方26・27号墳は中央自動車道の南側に所



第12図 24号墳平面図・断面図



第13図 24号墳石室展開図・閉塞部平面図・断面図



第14図 24号墳出土遺物

在する。26号墳は北北東に、27号墳は北東にそれぞれ主軸を探る。26号墳は今回調査した中で最も規模の大きなものであり、比較的豊富な副葬品が出土した。また調査区外南西側の畑地の中には、26号墳と同等の規模を持つ古墳が所在し、これらが一つの支群を構成していることを知ることができる。

今回調査した5基の古墳を含め、27基の古墳のほとんどが北もしくは北東に主軸をとることが共通事項であることが理解された(第26図)。以下にはそれぞれ古墳の概要について触れていく。

(1) 23号墳

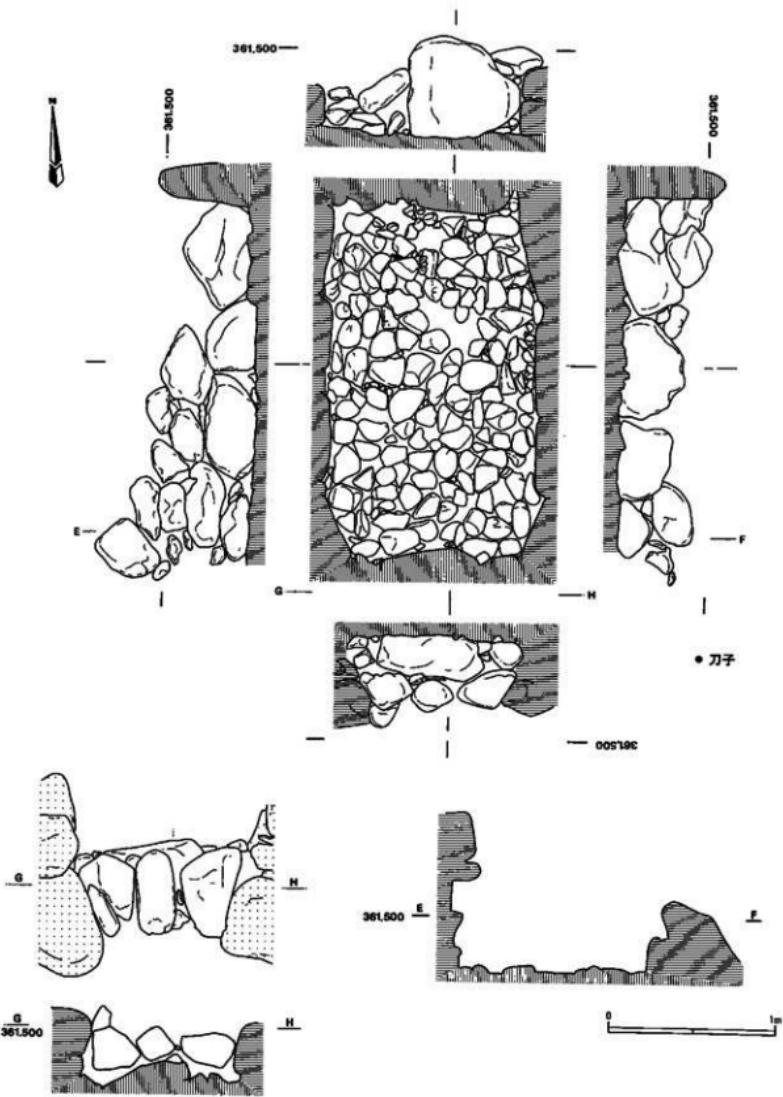
本古墳は仮ナンバー34号を付したもので、分布調査時にすでに石室が露出していたものである。石室内の清掃及び前部を中心とした発掘調査からすでに埴丘・天井石は失われており、石室は西側壁部の一部及び東側壁部が残る他は失われていることを知ることができた。また礫床は閉塞石下以外は現存しない。石室規模は閉塞石までで、全長約4.10m、閉塞石付近で幅約0.80mである。奥壁は並列する形で2枚の巨礫が利用され、高さ約0.90m、幅1.10mを測る。東側壁の高さからこの礫のさらに上部にもう一段、奥壁を構成する礫が存在したことを窺い知ることができる。東側壁は全長3.90m、残存する高さは1.20mで、最も高い箇所で3段の礫が積まれている。西側壁部は閉塞石付近のみ、わずかに1段が残存する。床は礫床と思われ、拳大の礫が散在していた。閉塞壁は奥壁より2.60mから3.80mにわたって存在する。

埴丘は封土を明確にはできなかったが、前部東側で古墳の基底部と思われる礫を確認した。礫は人頭大前後の大きさで、石室に向かって階段状に積まれており、礫と礫の間には拳大程度の礫を充填している。

出土遺物のほとんどは前部付近から出土した平安時代の土師器であり、古墳に帰属する遺物は認められなかつた。1から7は杯であるが、このうち1から3には壁面に「川勾」の墨書きが見られる。5は白茶褐色を呈し、他の杯と色調を異にする。形態的に他のものよりも若干古相である。また9は高杯の杯部である。内面には中心から放射状に暗文が施される。10は高杯脚部である。

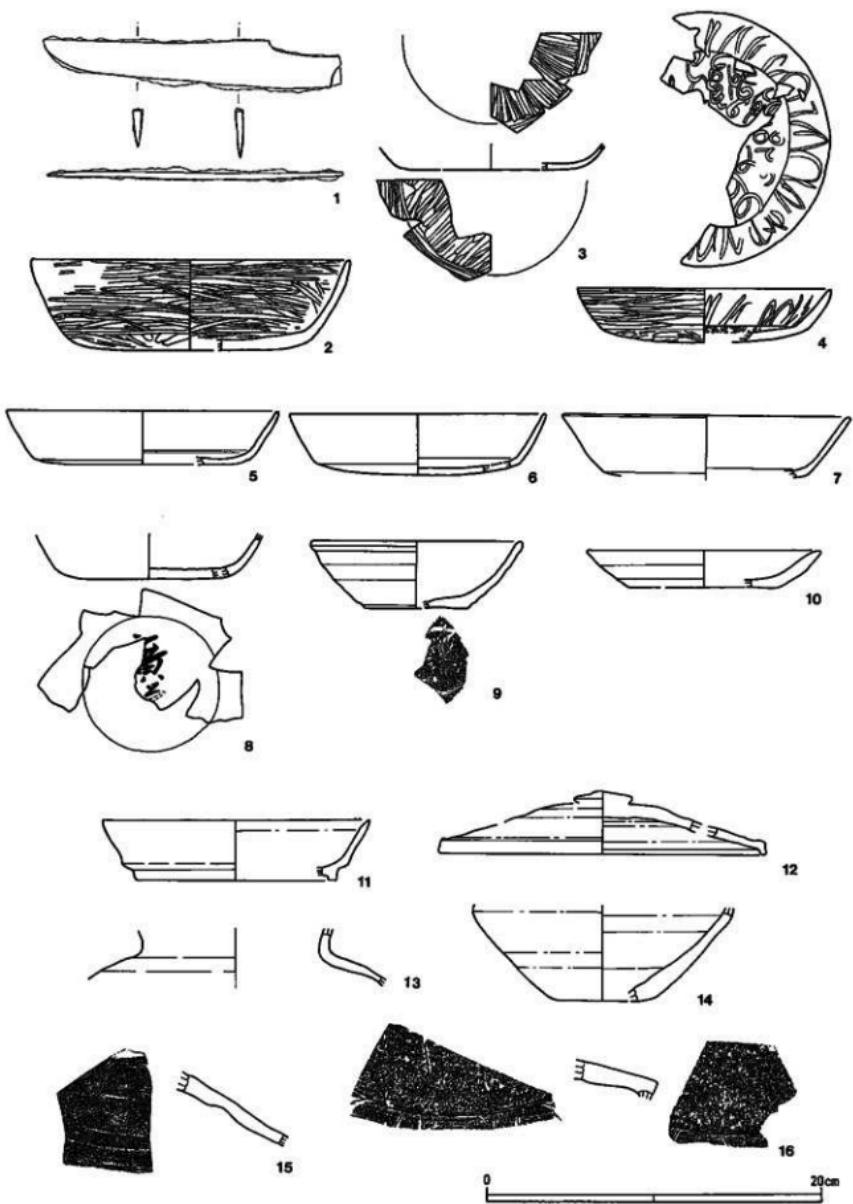


第15図 25号墳平面図・断面図



(2)24号墳

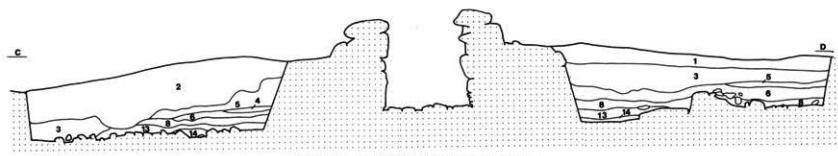
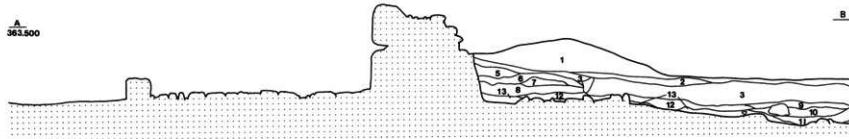
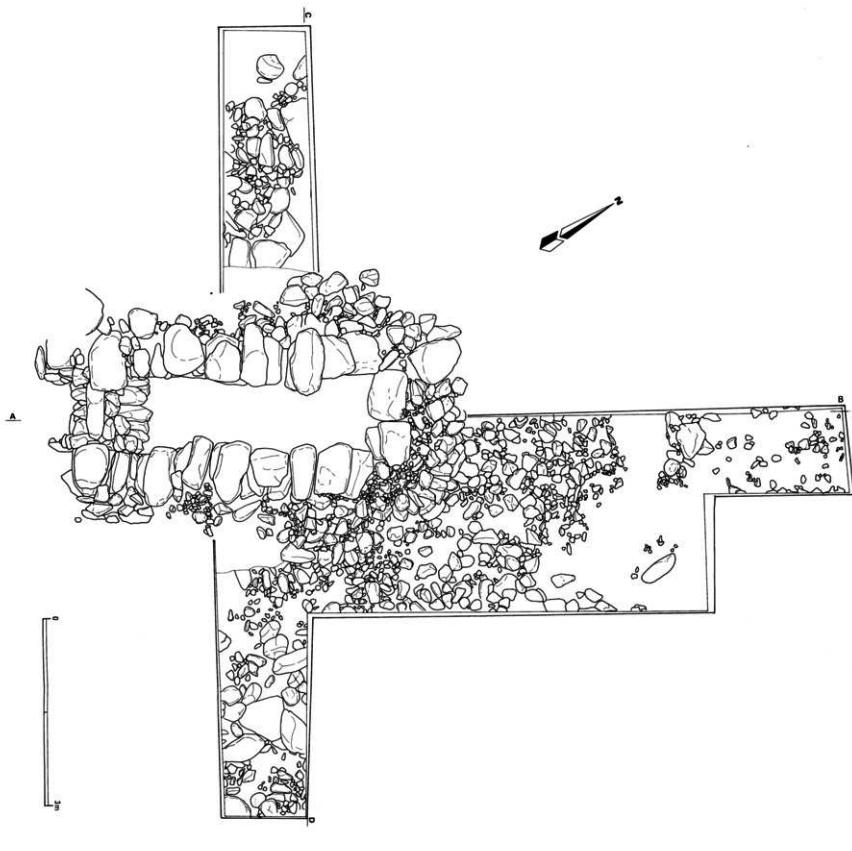
本古墳は仮ナンバー35号を付したものである。分布調査時には墳丘を構成する封土はほぼ失われ、大小の礫が集中する礫山状態であった。そこでこれらの礫を取り除いたところ、天井石が石室内に崩落した状況で確認された。墳丘規模は直径約9.00mの円墳で、ほぼ南方向に開口する横穴式石室である。石室の残存状況は比較的良好で、石室規模は奥壁から閉塞石までで、全長約3.10m、幅は石室中央部で約1.05m、閉塞部付近で約



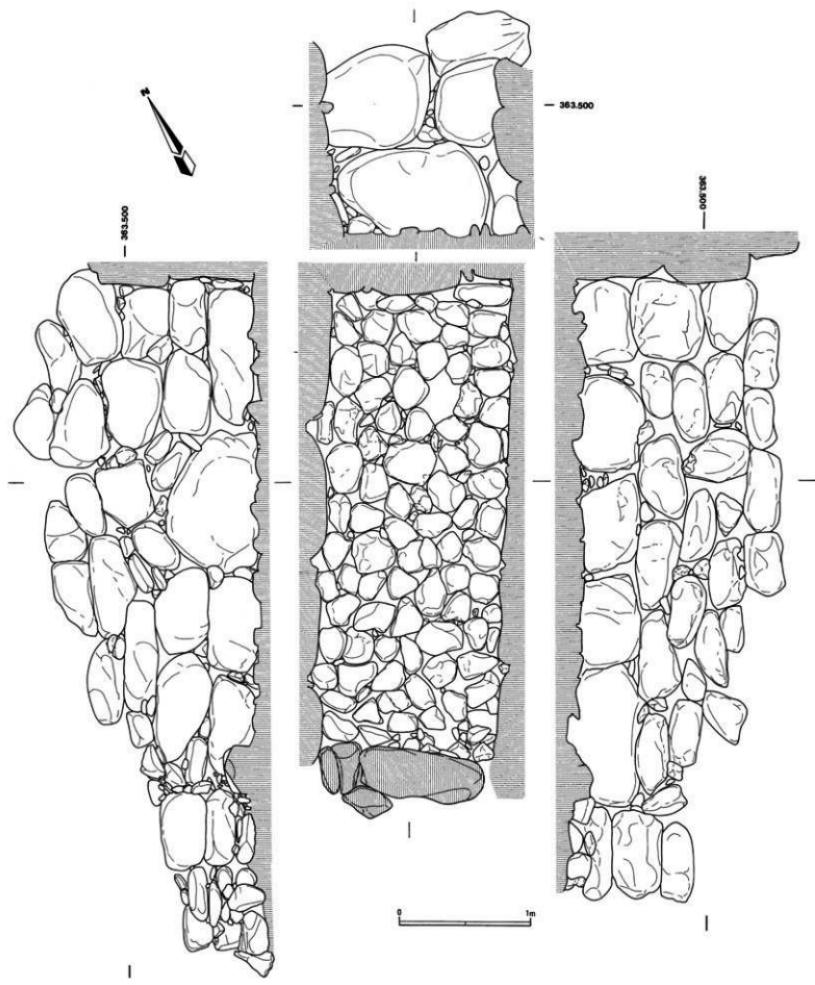
第17図 25号填出土遺物

第18図 26号構造物図・断面図

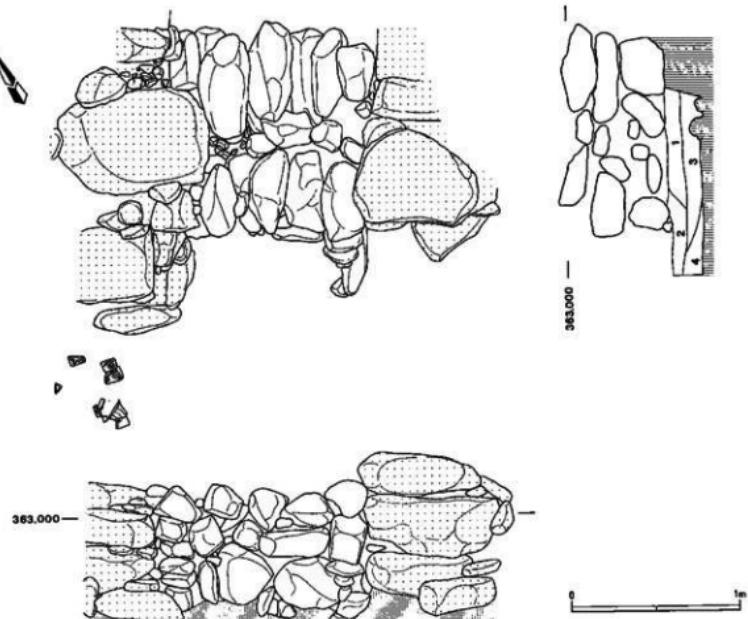
—25～26—



- 1. 壁土層 人間大の壁を多く含む。
- 2. 壁土層 砂利を多く含む。
- 3. 壁土層 黒色と少々青灰色を含む。黒葉で充満する。砂質でない。
- 4. 壁土層 黒色と少々青灰色を含む。程度のそれを含む。
- 5. 壁土層 黒色と少々青灰色を含む。程度のそれを含む。
- 6. 壁土層 壁の土壌である。やかしまでいる。
- 7. 黒褐色土層 黒褐色土とブリックを複数枚とブロック混在し、しまりはよい。
- 8. 黑褐色地質土層 壁の土とさわら。砂利の砂にこりが成され、しまりは弱いが密である。
- 9. 黑褐色地質土層 砂利で盛り上げられ。
- 10. 黑褐色地質土層 黒褐色土と少々青灰色を含む。よくくつき、壁を含む。
- 11. 黑褐色土層 黒色を多く含む。よくくつき、壁を含む。
- 12. 黑褐色地質土層 小さな砂利多量に混む。よくくつきで、砂利の壁が混入する。
- 13. 黑褐色地質土層 しまりは弱い。砂質で粒子は粗い。地盤を含む。
- 14. 黑褐色地質土層 しまりは弱い。砂質で粒子は粗い。地盤を含む。



第19図 26号填石室断面図



第20図 26号墳閉塞部平面図・断面図

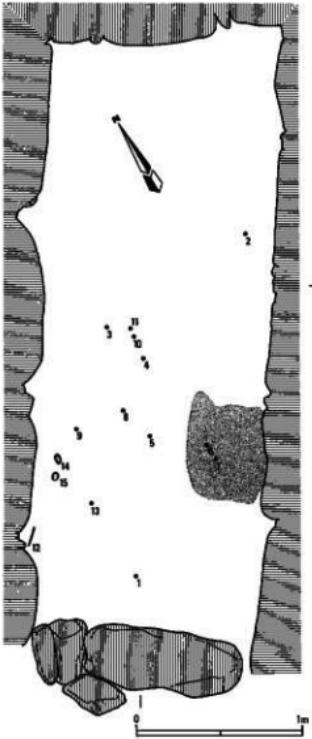
1.20mである。奥壁は下段には巨石一枚が残存しており、上段の礫は既に失われている。現状で高さ約0.80m、幅約1.00mを測る。側壁は一部埴丘上に所在した木の根による搅乱のため、東側壁部の閉塞部付近が押し出され崩落しかけているが、全体的に良好である。西側壁部は6段の石積みが見られ全長約3.10m、最大高約1.40mを測る。東側壁は4段の石積みが見られ、全長約3.20m、最大高約1.05mを測る。両側壁とも上段へいくに従って内傾する「持ち送り」の形態を採用している。床は礫床で、平坦面を持つ拳大から人頭大の礫を敷き詰める。閉塞部は縦に長く、上面と外側側面に位置する部分が平坦な礫を用い、その隙間に拳大の礫を詰めることでこれらの礫を安定させている。このため古墳正面から見たとき、左右側壁と閉塞部が一枚の面に見えるよう明らかに意識している。

本古墳は浅い周溝を持つ。周溝正面はブリッジ状に極めて浅くなる。周溝は最大幅約1.50m、最大深0.30mを測り、正面は多少張り出す。古墳の後方にあたる北東側は古墳のつくられる前から金川の洪水により多数の礫が集中する箇所であったようである。そのためこの部分は周溝を掘ることを避けている。

前庭部西寄りからは平安時代に帰属する須恵器甕が出土した。2-4は土師器甕である。平安時代のものである。

(3) 25号墳

本古墳は仮ナンバー36号を付したものである。東から西へ若干傾斜する緩やかな平坦面に近い傾斜地を選地として古墳を築いており、北側にはほとんど裾を接するように24号墳が所在する。分布調査で確認後清掃した上で、礫を取り除いたところ、24号墳と同様に南北方向に開口する横穴式石室を確認した。側壁部等がかろうじて残存しているに過ぎず、保存状況は良好とはいえない。埴丘規模は標高の若干低い西側に、裾部を示す礫列が確認できたため長径約11.00m、短径9.00mのやや楕円形を呈する円墳であると思われる。石室は現状で全長約2.05m、幅は石室中央部で約1.25m、閉塞部付近で約1.10mである。奥壁は下段には巨石一枚が残存している



第21図 26号墳石室内遺物分布状況

壁は全長4.75m、最大高1.50mを測り、最大5段の石積みが確認できる。西側壁は全長5.40m、最大高1.83mを測る。閉塞部は3段の石積みが現存する。前後2段に細長い縫を配置しており、内外面とも側面は平坦を呈するよう積んでいる。床は疊床であり、拳大から人頭大の縫を敷きつめている。奥壁付近には一ヵ所縫等何も存在しない箇所が認められた。

墳丘は一部封土が認められた。とくに石室裏面は若干版築が施されたような様子が観察できる。地山には金川の洪水により、多量の縫が含まれる。

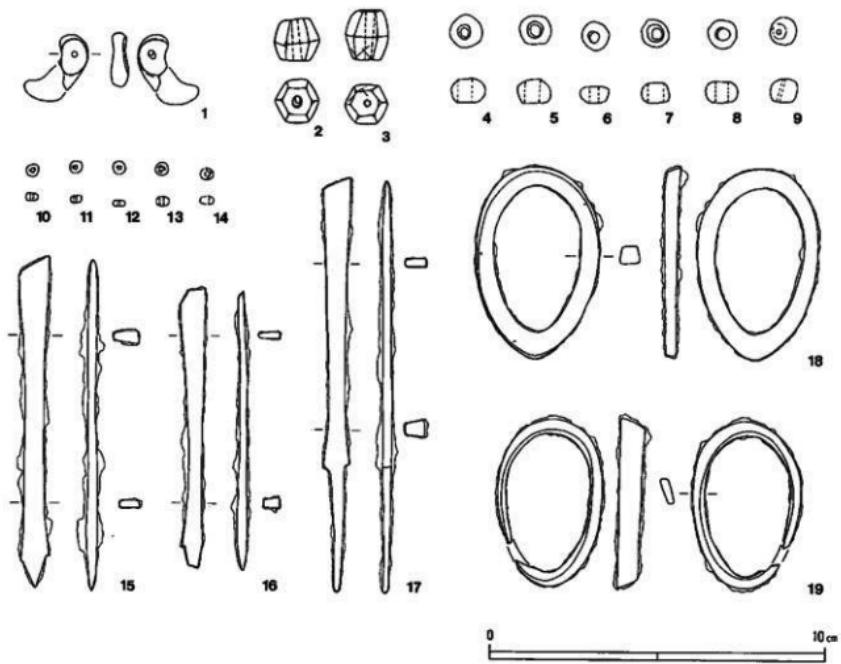
石室内からは被葬者の骨片の他、副葬品であると思われる玉類・武具類などが比較的数多く出土した。被葬者の骨片は石室全体から出土したが、とくに東側壁中央下部で集中してみられた(第21図では人骨集中範囲をスクリーンショットで示した)。また勾玉・ガラス玉等の玉類は石室中央部に集中し、刀装具や鐵錐等の武具類は両側壁直下で認められた。1は勾玉である。玉尾を欠損し、現状で長さ3.20cm、最大幅1.90cm、重さ1.91gを測る。孔は片側から穿たれる片側穿孔である。石材は蛇紋岩で、色調は黒色を呈する。2・3は水晶製切子玉である。2は六角形を呈し、高さ2.20cm、最大幅2.90cm、重さ2.65gを測る。孔は片側から穿たれる片側穿孔である。3は2と同様に六角形を呈する。高さ3.00cm、最大幅2.80cm、重さ3.09gを測る。孔は片側から穿たれている。水晶中には糸状の針が観察でき、俗に言う針入り水晶を石材として用いたものである。針入り水晶は、県内でも塩山市竹森付近に産地を求める能够ため、石材採取から古墳への副葬まで、一貫して在地で營

が、もとは2枚並列して所在したものと推測できる。東側壁部は閉塞部付近で石積みが3段程度残存する以外は、1段しか残存しない。閉塞部は2段の石積みが確認された。閉塞部から前庭部に広がるように縫が敷き詰められており、その縫の間からは古墳がつくられた年代よりも新しい土師器片が出土している。石室内からは、被葬者の副葬品であると思われる刀子が疊床直上より出土した(第17図1)。被葬者を安置した時、胸部付近に置かれたものであることが推測できる。第17図2から10は前庭部の縫付近から出土した土師器である。このうち2・3は杯で、外内部とも壁面を横ミガキ、底部内面を放射状に、外面を一方向にミガキが施される。4は内面は暗文を、外面は横ミガキを施す。8は底部に墨書きが見られるものである。「廣口」と読むことができる。11から16は須恵器で、16の外面には自然釉を観察できる。遺物についてはいずれも8世紀代のものであると思われる。すべて前庭部より出土した。

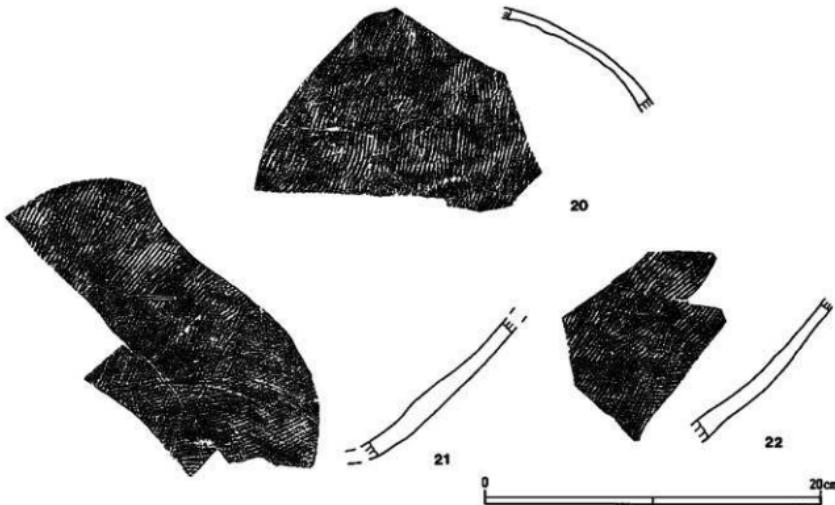
(4) 26号墳

本古墳は今回調査した中では最も大型である。中央自動車道の南側に位置し、東側には27号古墳が、西には調査区の外にやはり20m前後の古墳が所在する。これらの古墳が一支群を構成していたものと推測される。

本古墳は天井石が内部に落ち込むような形で検出された。側壁及び奥壁は一部露出する形で存在していた。墳丘規模は直径18.00mを測る円墳であると思われ、南北西方向に開口する横穴式石室を持つ。石室規模は奥壁から閉塞石まで全長約3.50m、幅は石室中央部で約1.35m、閉塞部付近で約1.30mである。奥壁部は下段に一枚、上段には並列して2枚の縫が見られ、さらにその上部には縫が所在し、高さ1.65m、幅1.30mを測る。側壁は東側の方が若干良好な残存状況を呈する。東側

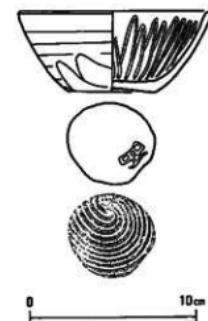
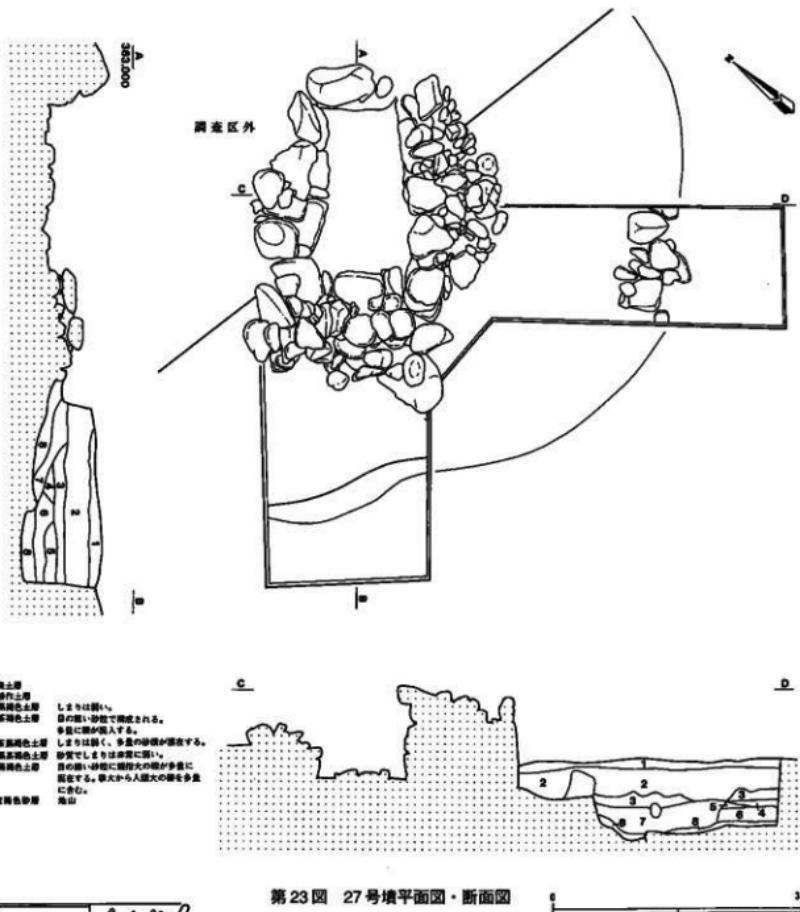


0 10 cm



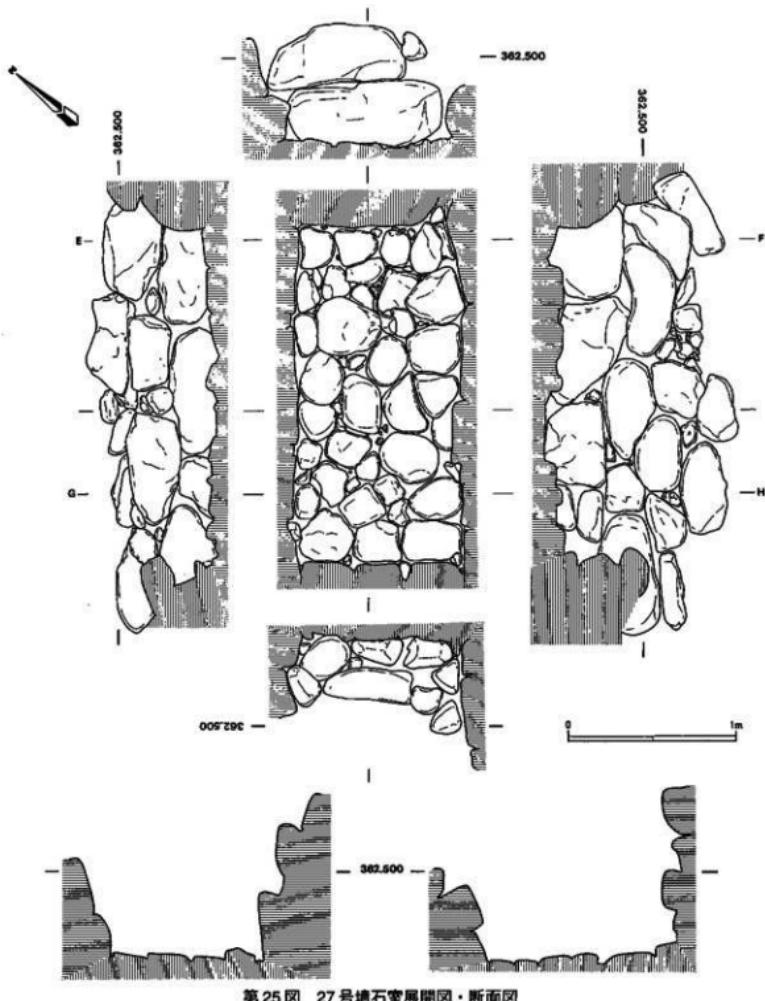
0 20 cm

第22図 26号墳出土遺物



第24図 27号墳出土遺物

まれた可能性がある。4から9はガラス製丸玉である。ここではガラス製小玉と明確に区別するため、直径が1.00cm以上のものをガラス製丸玉と呼ぶ。4から8は化成ソーダガラスを原料としたものである。いずれも表面は風化が著しく、色調は緑青色である。孔は若干大きく、まっすぐに開けられている。9はアルカリ石灰ガラスを原料としたものである。色調は濃青色である。穿孔部は細小で、上部へ向かって傾斜する。上下部分は面が成立するものである。側面のガラスに含まれる混合物の様相から、管切り技法を用いている可能性が高い。10から14はガラス製小玉である。5点を図示したが、既に破損し図化・計測の不可能なものも存在する。いずれも色調は明青色であり、原料はアルカリ石灰ガラスを用いているものと思われる。15から17は鉄錠である。15は長さ19.00cm、厚さ4.00cmを測り、重さ10.00gを測る。16は長さ16.30cm、厚さ3.50cm、重さ5.40gを測る。17は長さ25.10cm、厚さ3.50cm、重さ9.03gを測

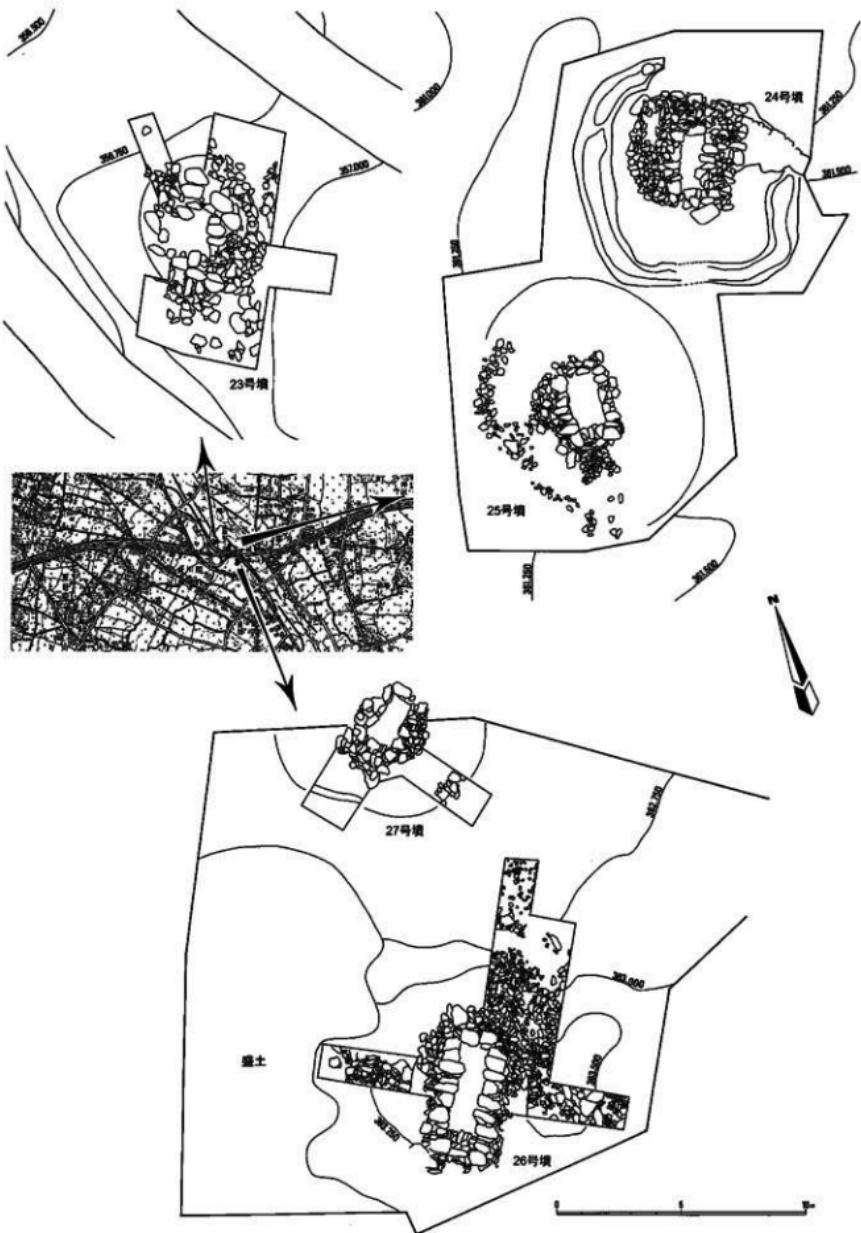


第25図 27号墳石室展開図・断面図

る。18・19は刀装具であると思われる。18は鉄製で長径11.20cm、短径7.50cm、重さ17.71gを測り、断面は台形を呈する。側面には3ヶ所に糸状の針金を通す孔が穿孔されており、糸状の金属が見られる。19はやはり鉄製で長径10.02cm、短径6.50cm、重さ9.62gを測る。断面は三角形に近似する台形状を呈し、上方へ内傾している。20から22は前頭部付近より出土した須恵器片である。壺であると思われ、東側側壁部付近でまとまって出土した。破片はいずれも胴部破片である。7世紀初頭に位置づけられると思われる。

(5)27号墳

本古墳は26号墳と同様に中央自動車道の南側に位置する。本墳の南西には27号墳が隣接して所在する。古墳の北側半分は調査区外に所在するため、調査区外の石室部分のみについては地権者のご厚意により発掘調査させて頂いた。このような理由から墳丘規模を明確にすることはできなかったが、調査区に位置する墳丘の調査状況から推定7.00m前後の円墳であると思われる。発見時、本墳には多数の拳大の砾が積まれるような形で残存していた。これらの砾を取り除いたところ、既に天井石を失った石室を確認した。他の4基と異なり、北西



第26図 第2次調査区古墳配置状況



第27図 堤防状遺構平面図・断面図

に主軸をとる横穴式石室である。石室の残存状況は比較的良好で、規模は全長約2.00m、幅は石室中央部で約0.95m、閉塞部付近で約1.00mである。奥壁は現状で横に長い巨石が2段積まれている。高さは0.70m、幅は0.90mを測る。側壁は南西側壁部が南東側より若干残存状況が良好で、現状で4段の石積みが確認できる。全長2.50m、最も高い箇所は約1.10mを測り、礫と礫の間には拳大の礫を充填している。南東側壁部は全長2.56m、最も高い箇所で約0.70mを測り、3段の石積みを確認できる。閉塞部は高さ2段の石積みが確認され、前庭部に向かって広がるように礫が積まれていた。礫床は人頭大の平坦面を持つ礫が全面に敷き詰められており、隙間に小礫が充填されている。

墳丘封土はほとんど残っていないが、南西トレンチにおいて地山面に墳丘の裾部を示すものと思われる礫列を確認した。地山面は黄茶褐色の砂質層で、若干高い箇所に石室を築いている。

当該期の遺物の出土は見られなかったが、石室内より平安時代の杯が1点出土した。内面には暗文が見られ、外面は底部付近にヘラ削りが施される。底部には「西」の刻書が施されている。

第3節 歴史時代の遺構と遺物

(1) 堤防状遺構

金川公園内の東端は現在も堤防が若干張り出すような形になっており、堤防が金川本流の極めて近い所に所在する。金川左岸の四ツ塚古墳群内にも自然石を利用した、かつての堤防がいくつも所在しており、何回か繰り返し堤防が築かれたことがわかる。

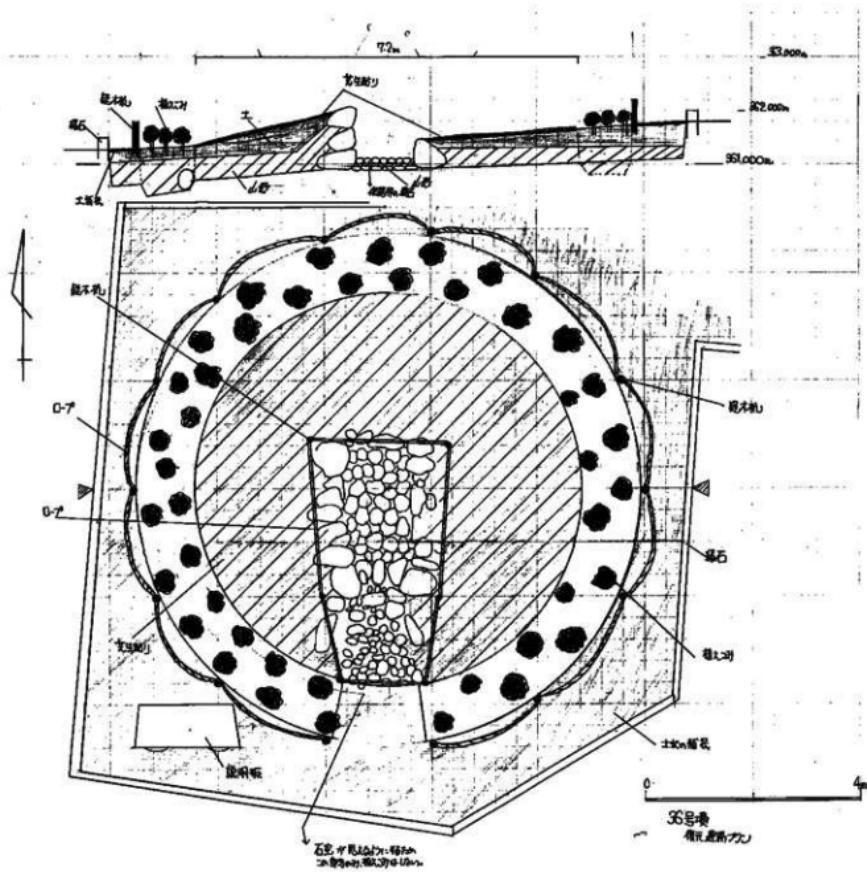
このような環境の中で24・25号墳の東側には、金川に沿って石積みの堤防跡を確認した。堤防は川の下流に向かってハの字状に開く形態を探っており不連続堤であると思われ、全長約12.00m、幅約2.50m、馬踏約0.30mから0.40mを測る。礫の自然崩落が進んでいるが、川表側、川裏側ともに石積みによって築かれている。石積みはまず人頭大からそれ以上の大きさの礫を両側に堤防幅に並べ、砂質土を盛り上げた盛土面に裏込め石である拳大の礫を入れながら積み上げたものと思われる。川表側及び川裏側の大礫は、2段程積み上げられている程度で、高さは地表面より約30cm程度である。また礫の積み方に規格性を見いだすことはできず、乱積み状態である。

礫と礫との間から明治期や昭和期に位置づけられる陶磁器片等が出土しているが、遺構の性格上これらが堤防に伴うものであるか否かは不明である。

第6章 遺構の保護と保存方法

第1節 遺構の保護と保存の方法

「金川の森」公園内では5カ所の遺跡包蔵地及び古墳を確認した。このうち1カ所は前年度発掘調査の終了した経塚古墳であり、これについては平成6年に山梨県指定史跡に指定され復元整備が成されている。4カ所は今年度調査対象となっていたが、盛土によって保存されるもの、あくまでも公園整備のみで開発行為の加わらないもの、発掘調査後に復元整備されたものなど様々な保存形態が採られている。次に遺跡ごとに保存方法などについてその概要を記述する。



第28図 25号墳復元整備プラン

南西田遺跡の保存 本遺跡は当初、A区（観察広場南東部駐車場）・B区（東屋）・C区（トイレ）の3地区について、試掘調査時にいずれも遺物の出土が見られ、また周辺には大原遺跡などの平安時代の大集落が所在することから発掘調査が予定されていた。A区については調査対象面積約470m²で3地区の中では最も広範囲であった。試掘調査時には調査範囲内に6本のレンチが設定され、このすべてのレンチから古墳もしくは平安時代に位置づけられる遺物を含んだ層位が確認された。包含層は金川に近接するほど高い地点で確認され、表表面の最も浅いところ0.2mを測る。また最も深いカ所では地表面下1.10mの地点で遺物包含層を確認した。しかし駐車場であり、盛土を施することで遺跡を保護することが可能であったため、盛土による保護地域とされた。

このため東屋建設予定地のB区及びトイレ建設予定地のC区のみ、発掘調査を実施した。

西林遺跡の保存 本遺跡は金川右岸に位置し、現在の「冒険遊び場」と「野の花広場」に所在する。金川に沿って尾根状の小山が連続するこの地点には、方形を基本形とする石積み遺構28基が確認された。このうち6基については遺構の性格を理解するため、及び「野の花広場」造成のために発掘調査を実施したが、出土遺物等は見られず、また県内においても類例に乏しいため、それらを明確に把握することはできなかった。しかし、近県の類例などでは中近世の民間信仰等に関係する例が多く見られるため、本遺跡もこのような性格の遺跡である可能性が高いものと考えられる。

このため、発掘調査を実施しなかった22基については写真撮影及び長軸・短軸・高さや石積みの状態などを記録した上で、それぞれの石積み遺構に木杭でナンバーを付設した。また遺跡の西端には遺跡の概要を示す説明板を設置し、遺跡の周知化に努めた。

四ツ塚古墳群の復元整備（第28回） 本遺跡は金川左岸に金川に沿うように立地する。この地区は公園内にサイクリングロードを造成する予定になっており、古墳を現状保存するために分布調査を行った。古墳は表面を精査した上で形状、石室の露出状況やマウンドの残存状況等を現状確認する方法を採用した。この結果、36基の後期古墳の可能性が極めて高いものが確認され、それに伴ってサイクリングロードの路線も古墳を避けたコースに変更された。しかし2本のサイクリングロードが合流する調査区東端の地点においては、古墳の可能性が高い2基の円形の石積みが所在し、当初は記録保存することがやむを得ない措置と考えられた。このため2基（23・24号墳）の発掘調査を実施したところ、2基とも古墳であり、とくに23号墳は石室の残存状況も良好であることが判明した。よってその保存措置について協議を重ねた結果、甲府林務事務所の理解と協力によりこの地点のサイクリングロード計画は大幅に変更され、古墳は埋設された上で復元保存されるに至った。復元については、石室には山砂を充填した保存処置を施し、調査時に得られたデーターをもとにマウンドを復元した上で裾部には植木を施した。また23号墳は閉塞石部分のマウンドに擬石を古墳入口部を模して設置した。24号墳は残存状況が良好とはいえない、疊床部分のみがかろうじて残存しているに過ぎなかった。そのため、この部分が見学できるように石室を露出させ、埴丘範囲に盛土を施した上で古墳裾部には植木を施した。これら2基については発掘調査から得られたデーターをもとに説明版を作成し、古墳脇に設置した。

また分布調査時には既に石室の露呈した古墳が所在したため（23号墳）、これについても発掘調査を行い埋設保存した上で看板を付設した。

一方中央自動車道の南側に広がる「桜広場」にも2基の古墳が所在した。26号墳は石室の残存状況も良好であったが前庭部は調査区外であるため、古墳全体を復元整備することは難しかった。また27号墳も同様に石室の北西側半分が調査区外に位置するため26号墳と同様である。そのため、調査区内で復元できる範囲内でマウンドに盛土を施することで復元するに至った。古墳裾部には植木を施し、発掘調査から得られた成果をもとに概要を記した説明版を設置した。

豆塚遺跡の埋設保存 本遺跡は金川右岸の公園東端に位置する。もともとこの地に所在した「バーバードゴルフ場」を整備するため、試掘調査を行った。調査区東には中央自動車道建設時に発掘調査された豆塚遺跡が所在しており、本遺跡もこれらと同時期の遺構・遺物の出土が想定された。

幅約2m、長さ約10mの試掘坑を9本設定したところ、調査区中央及び東側で表表面より約0.5m下層で縄文時代晚期及び平安時代の遺物が確認された。遺物の状況は良好であったが、いずれも小片であるため、ここに図示することは困難である。

この結果を受けて甲府林務事務所と協議の結果、当地はもとから存在した「バーバードゴルフ場」の整備を目的とした造成であり、現地表面を掘り下げることはないとの事実確認から、遺跡は埋設保存されることと

なった。そのためこの地に遺跡が存在する旨を遺跡の内容を説明する説明板として設置し、周知化に努めるに至った。



1. 南西田遺跡（B・C区整備状況）



2. 四ツ塚古墳（24・25号墳）整備状況



3.24号墳



4.24・25号墳説明板



5. パーティーバードゴルフ場(豆塚北遺跡)整備状況



6. 豆塚北遺跡説明板

第7章 若干の考察

第1節 四ツ塚古墳群の築造年代

金川流域付近には古墳時代後期の群集墳が多数所在することは、当地域の古墳群の様相について明らかにする中で、既に多くの論文・報告書等で再三述べられてきた。また近年においては、これらの古墳群が次々に発掘調査を受ける機会を得、墳丘や内部構造・副葬品などが解明されることで多くの成果をもたらしてきた。しかしほとんどの古墳が、後世の盗掘を受けていること等の理由から一括した副葬品が得られにくい、またはもともと副葬品がほとんど皆無であることもあって、いまひとつ古墳個々の築造年代を明らかにすることが困難な状況になつていて、そのような状況から、甲斐地域の古墳時代後期の古墳群の様相については、盆地中に所在する古墳群各々の変遷や出現期の様相が判然としない結果になっている。そしてこのような事実は当地域の古墳時代後期の研究を進めていく中で、ひとつの問題点となっていると思われる。

今回の四ツ塚古墳群第2次発掘調査の中でも、やはり上記のような理由から発掘調査を行ったすべての古墳の築造年代を明確にすることはできなかった。そのため小稿では上記のような大きな問題の解決策を提示することはできない。しかし古墳各々からの出土遺物を確認することで、古墳の造られた時期についてその可能性を示し、今後の古墳編年研究の一助になることを目的とする。また盆地内の群集墳と比較・検討することにより、当該期の群集墳の様相についても若干触れてみたいと考える。

今回の調査では、第26号墳の前庭部南西側で須恵器甕破片及び石室内より玉類等の副葬品が出土した。本墳では、人骨の出土状況から初回の埋葬の後にも数回の追葬が行われたことが認められる。須恵器甕破片は前庭部の西側壁部の南西端部に接するように出土した。いずれかの被葬者は埋葬時のものであろうが、地山直上で出土していることや石室にはほど近く、数回にわたって積まれたと思われる閉塞石の下層部分からの出土であることを考え併せて、古墳築造期にはほど近いものであろうと推測される。出土須恵器甕は、胸部破片の出土があるが、7世紀初頭のものと推測され、古墳の築造時期もその年代かもしくはそれより遅るものと思われる。このような状況から、今回の発掘調査の中でこれらの遺物が古墳の築造時期に伴う可能性が最も高いものと思われ、古墳の築造時期を知る直接の手がかりになり得るものと考えられる。

第23号墳では前庭部覆土中より、閉塞石及び既に崩れた砾床の石材に混入するように、平安時代を中心とする遺物が見られた。第24号墳の前庭部東側では、平安時代の所産と思われる須恵器甕破片・杯等が出土した。須恵器甕は、閉塞部と周溝部の間の前庭部に広く散在している状況で出土しており、古墳が築造された後も、しばらく墓前で祭祀行為が行われていた可能性が示される。また第25号墳前庭部砾内でも平安時代を中心とする遺物が多数出土したが、それらに混じって8世紀代に位置づけられる須恵器甕破片が出土している。第27号墳では、石室内より底部に刻書を持つ平安時代の甲斐型杯1点を認めたのみである。これらの古墳の遺物の出土状況はいずれも古墳築造の際に納められたものとは考えにくく、築造からしばらく時間を経てからのものであると推測される。また第25号墳石室内中央部北よりの砾床直上からは刀子が出土しており、これについては被葬者埋葬時に副葬した品であると思われる。

一方第1次調査において発掘調査された22基の古墳のうち、第2号墳及び第5号墳から出土した遺物の中には、一部6世紀末～7世紀初頭に帰属年代の求められるものが見られ、古墳の築造時期に近接するものではないかと思われる。

このように概観すると、現在調査を行った27基の古墳のうち築造年代の比較的早いものはいずれも6世紀末～7世紀初頭のものである。そのため四ツ塚古墳群の形成がこの時期に開始される可能性は極めて高いものと思われる。

さらに金川流域に展開する四ツ塚古墳群以外の群集墳について目を向けると、金川右岸に位置する国分古墳群では既に6基の古墳が調査されており、古墳群の築造開始時期が7世紀初頭であることが明らかになっている¹⁾。また金川左岸の長田古墳群では、平成元年から行われた発掘調査で35基の古墳の存在が明らかにされた²⁾。このうち最も古いものは6世紀中頃の遺物を出土していることから、この年代を古墳群形成期の初現と考えることができる。このことから長田古墳群は四ツ塚古墳群・国分古墳群に先立って築造が開始されたことを理解

することができる。このような事実が、近年の群集墳成立過程の研究の中で脱かれているような、地域的な理由によるものなのか、それとも中央勢力の交代に伴って再編成されていった結果なののかは、まだまだこれから検討する必要がある。しかし7世紀初頭になって盆地内にはほぼ一齊に群集墳が築造される背景には、一体どのような動きがあるのかを解かなければ、古墳時代後期の甲府盆地の様相に迫ることは難しいものと考える。

以上雑ばくではあったが、四ツ塚古墳群形成時期について気が付くことを若干書き留めてみた。それは四ツ塚古墳群発掘調査の中で得た成果のほんの一端でしかない。しかし甲府盆地の古墳時代後期の様相を明らかにする上で、その一助になれば幸いである。

第2節 第26号墳出土玉類について

前述したとおり第26号墳石室内からは、まとまって玉類の出土が見られた。玉類は主に首飾りやプレスレッド、時には足玉など装身具として用いられていたものである。全国的に古墳時代後期には様々な石材で多様の玉類を製作するため、色彩に富んだゴージャスなものが出土することは珍しくない。これまで四ツ塚古墳群の調査では、これほどまとまった玉類の出土は見られなかっただため、どんな首飾りが用いられていたかを知る以外にも、玉類の流通や製作技法を知る上で非常に良好な資料である。ただ残念なことに本古墳では度重なる追葬が行われており、首飾りの所有者が一人であるとは限定できない。つまり今回出土した玉類が一つの首飾りを構成するのではなく、それぞれ若干の時間差を持っている可能性があるため、首飾りの復元には至らないということである。

勾玉（第22図1）は蛇紋岩製である。盆地内で蛇紋岩製の玉類を出土しているのは、東八代郡中道町の考古博物館構内古墳で勾玉3点と丸玉17点、国分策地1号墳ではやはり丸玉1点、及び姥塚無名2号墳では勾玉1点など、この時期においては勾玉に限らず利用されている石材である。

水晶製切子玉は2点が認められた（第22図2・3）。水晶製切子玉は当該期においては非常にボビュラーな玉の一種で甲府盆地内全域で確認されている。本古墳とほぼ同時期の築造と推測される四ツ塚2号墳でも出土が見られる他、金川流域の古墳では国分策地1号・2号・4号墳、姥塚無名2号墳などでも複数出土している。また切子玉の他にも姥塚無名2号墳では棗玉が、甲府市の大藏經寺山15号墳や北巨摩郡双葉町の双葉2号墳では算盤玉が、東八代郡八代町の御崎古墳では丸玉がそれぞれ出土しているなど、その形もバリエーションに富んでいる³⁾。本古墳より時期的にもかなり先行する古墳時代前期の甲斐銚子塚古墳（東八代郡中道町）にも硬玉製勾玉とともに水晶製勾玉4点が副葬されており⁴⁾、さらに中巨摩郡敷島町御岳田遺跡では水晶製丸玉の未製品が出土するなど⁵⁾、甲府盆地は水晶の産地に近接しているせいであろうか、水晶と密接に関わっているような観がある。

特筆できるものとしては、本古墳から出土した第22図3の切子玉には包含物（インクルージョン）⁶⁾として俗に言う「針」が含まれていることは既に報告した。包含物は産地の特徴の一つであり、「針」については塙山市竹森のものが有名である。本遺物をただちに竹森産のものと断定することはできないが、甲府盆地が上記のように水晶産地と密接な関係にあることを考えると、盆地外部からもたらされたものと言いかつることはできない。今後水晶を産する山々と水晶製品を出土する遺跡をつなぐ、水晶を石材とした玉作り工房跡の存在の有無を明らかにすることで、盆地内の水晶製玉類の流通経路を知ることができるものと考える。

ガラス玉は丸玉と小玉がそれぞれ検出された（第22図4～14）。ガラス玉は弥生時代から見られる装身具の一つであり、古墳の他にも方形周溝墓等の主体部や周溝部など広く副葬されるものである。盆地内で最も早い確認例は中巨摩郡敷島町の金の尾遺跡（弥生時代後期）のものである。その後古墳時代を通して副葬され、当該期においても盆地中の古墳で数多くの出土が確認されている。とくに中巨摩郡竜王町と北巨摩郡双葉町にかかる赤坂台に分布する赤坂台古墳群では、双葉町二ツ塚古墳で小玉171点が、竜王町竜王3号墳で小玉377点が確認されるなど一古墳の保有数が多いのが印象的である。四ツ塚古墳群内でも四ツ塚2号・4号・15号墳でそれぞれ確認されている。国分策地古墳群や姥塚無名2号墳でも出土しているなど、金川流域でも入手しやすい玉の一つであったことを窺うことができる。

ガラス製丸玉は製作技法に何通りかの方法が知られている。筆者が盆地内で出土した玉類を概観したところ芯棒にガラス管を巻き付けて製作する巻き付け技法と管状にのばしたガラスを一つ一つ切断し、切断面を熱することで角を鈍角にする管切り技法の2種に大別することができた⁷⁾。この結果、四ツ塚15号墳で出土したガ

ラス玉はアルカリ石灰ガラスを原料に用いてすべて巻き付け技法で製作されているのに対し、本古墳出土のガラス玉は3点が化成ソーダガラスを原料としており、アルカリ石灰ガラスを用いたものは1点が存在するのみで、しかも管切り技法で製作されたものである。同じ古墳群の中で、このような差異は、流通経路の異なりを示すものなのかそれとも時期的なもののかは今のところ明らかではない。今後検討していくべき課題である。

以上玉類について概観してきた。本古墳出土の玉類は四ツ塚古墳群の中では比較的種類も多く、まとまっているが一括した遺物ではないため、組成についての情報はほとんど皆無に等しい状態であった。さらに盆地内出土の玉類もまだまだ資料蓄積の段階にあり、その様相は不明な点が数多い。そのため本古墳で出土したそれぞれの玉の類例を示し、若干の問題点を示したのみで考察に至らなかった。今後の資料の増加をまって、徐々に明らかにしていきたい。

註

- 1) 猪股喜彦 1998 「国分古墳群」「山梨県史 資料編1 原始・古代1 考古（遺跡）」 山梨県
- 2) 宮沢公雄 1998 「長田古墳群」「山梨県史 資料編1 原始・古代1 考古（遺跡）」 山梨県
- 3) 石神孝子 1994 「古墳出土玉類の基礎的研究」「山梨考古学論集Ⅲ」 山梨県考古学協会
- 4) 石神孝子 1999 「装身具」「山梨県史 資料編1 原始・古代1 考古（遺物）」 山梨県
- 5) 大嵩正之ほか 1999 「御岳田遺跡」 敷島町教育委員会
- 6) インクルージョンとは水晶が結晶体生育段階において、周辺環境に存在する他要素を取り込んだその包含物を指す。昆虫や気泡・草などがその代表的なものである。産地により包含物が異なるのも特徴の一つである。俗に草、もしくは枯れ草などといっている種類のものは電気石の針状結晶である。塩山市竹森で産出するものが全国的に有名である。
- 益富寿之助 1974 「鉱物—やさしい鉱物学—」 保育社
- 7) 石神孝子 1998 「古代甲斐におけるガラス玉の製作と流通について」「第8回テレビ山梨サイエンス振興基金研究報告書」(財)テレビ山梨厚生文化事業団

第8章 まとめ

—四ツ塚古墳群の提起する問題—

今回は南西田遺跡・西林遺跡・四ツ塚古墳群の3遺跡の発掘調査を実施し、その他豆塚北遺跡の遺跡確認調査、竹原田古墳群の説明板設置等、従来の発掘調査だけでなく遺跡の保護及び保存にも力を注いできた。また、これらの発掘調査を通して、改めてこの金川流域が遺跡の密度の濃い地域であるということを認識した。これは言い換えればこの地域が古墳時代後期から平安時代・中近世に及ぶまで、甲府盆地の中でいかに中心地域の一つであったかということでもある。そしてそのような事実は、この地域の度重なる発掘調査の結果を見れば、もはや当然のこととさえ思えるのである。

しかしこのように資料が増加する反面で、新たな疑問もまた生まれてくる。今回発掘調査を行った四ツ塚古墳群は発掘調査に伴った古墳分布調査から、未調査の古墳約33基が少なくとも現存することを明らかにした。既に発掘調査が終了した27基と併せると、この地域には約60基以上の古墳が所在することになる。さらに周辺の国分寺地古墳群や長田古墳群、また経塚古墳などのように単独で立地するものなどを併せると、数百基の古墳が位置することになる。考察でも述べたが、これらの古墳の築造が早いものでは6世紀代、ほとんどが6世紀後半から7世紀代に行われている。つまり追葬などを考慮するとこの時期に数百人の人々が、これらの古墳に葬られたことになる。

それではこの地域に葬られた人々はいったいどこで生活していたのであろうか。先にも述べたが、1979年に調査された二之宮・姥塚遺跡では古墳時代の住居跡272軒が確認された。集落の規模及び住居跡から概算される人口を考えた時、この集落の人々が金川流域の古墳群の一角に葬られたのではないかという推測は十分成り立ち得ると考える。しかし今後発掘調査が進めばさらにこの地域における当該期の集落跡の分布が明らかとなるであろう。その上で徐々に古墳群と集落跡の分布状況が明らかになり、それに伴って、各群集墳や群集墳内における支群のあり方についても明確になっていくと思われる。さらに大型横穴石室墳である姥塚古墳との関係も明らかになっていくであろう。

また二之宮・姥塚遺跡では古墳時代中・後期及び平安時代の住居跡に混じって数軒ではあるが古墳時代前期の住居跡が確認されている。それとともに同時期もしくは中期のものと思われる円形の周溝をもつ墳墓4基の存在も明らかとなった。これらは金川流域に爆発的に住居跡及び古墳が増加する前段階の、いわば基盤的集落であると思われる。墳墓については、現在のところ前期において円形の低墳丘をもつ墳墓はそれほど類例がない、中期においては曾根丘陵等に円形の群集する低墳墓の類例があるがこれらとはやや状況を異にする。またこれを群集墳の初期の段階と見るには、形態や前段階とのつながりを考えると慎重を要する。いずれにしてもどのような理由によって四ツ塚古墳群や周りの大集落が成立していったのかを紐解くことは、当該期の様相を明らかにする上で、重要なポイントになるものと思われる。

以上、考察とともに四ツ塚古墳群をめぐる諸問題について改めて提起してきた。それらは提起のみに偏り、問題の解決には至らなかったことを深く反省している。今後、資料の増加や見直しなどを行なながら、提起した問題について順を追って明らかにできるよう努力していただきたい。

西林遺跡



1. 石積み遺構群近景



2. 3号石積み遺構

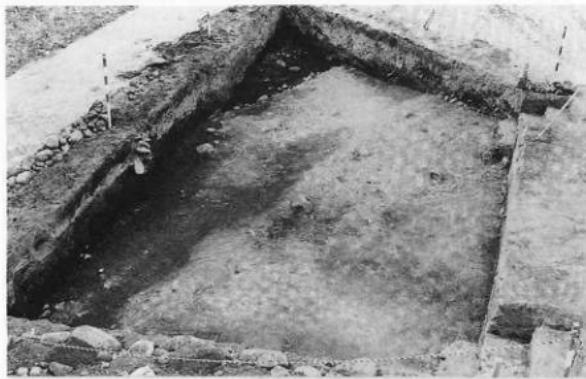


3. 2号石積み遺構完掘状況

南西田遺跡



4. B区近景



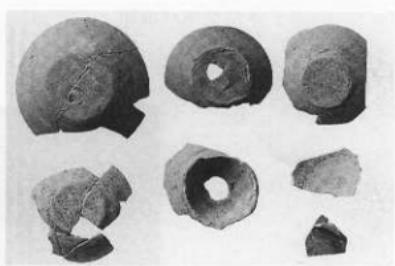
5. B区完掘状況



6. C区完掘状況



7. B区作業風景



8. 出土遺物



9. A区整備状況



10. B・C区整備状況

四ツ塚古墳群



11. 23号墳石室完掘状況



12. 23号墳全景



13. 23号墳閉塞石周辺



14. 23号墳出土遺物



16. 墨書土器「川勾」



17. 墨書土器
「川勾」



18. 四ツ塚古墳群分布調査風景



19. 24号墳天井石崩落状況



20. 24号墳全景



21. 24号墳（西から）



22. 24号墳閉塞部



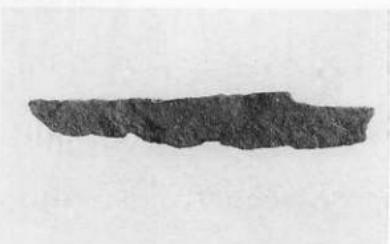
23. 24号墳出土遺物



24. 25号墳全景



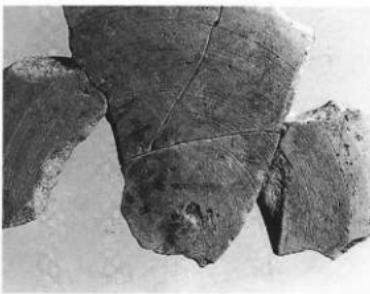
25. 25号墳石室



26. 25号墳出土遺物(刀子)



27. 25号墳出土遺物



28. 墨書土器「廣」



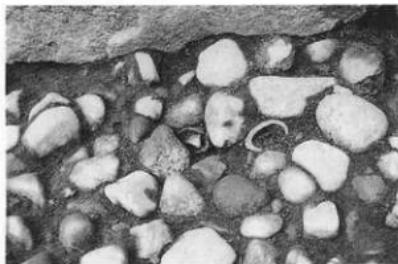
29. 26号墳石室



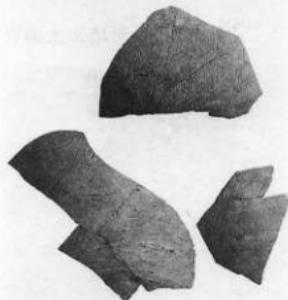
30. 26号墳（北東から）



31. 26号墳閉塞部(左下に須恵器甕出土)



32. 26号墳刀装具出土状況



33. 26号墳前庭部出土須恵器甕



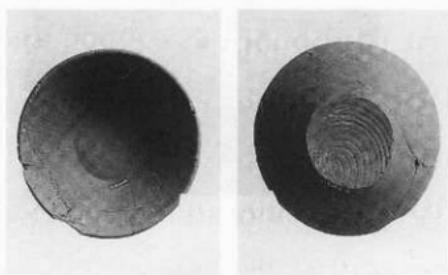
34. 27号墳全景



35. 27号墳調査前状況



36. 27号墳側壁部



37.38. 27号墳出土遺物



39. 刻書土器「西」



40. 堤防状遺構全景



41. 豆塚北遺跡試掘状況

報告書概要

フリガナ	ミナミニシダイセキ・ニシバヤシイセキ・ヨツヅカコフングン
書名	南西田遺跡・西林遺跡・四ツ塚古墳群
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第162集
編著者名	石神孝子
発行者	山梨県教育委員会
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
住所・電話	〒400-1508 山梨県東八代郡中道町下曾根923 TEL 055-266-3016
印刷所	横河グラフィックアーツ株式会社
印刷日・発行日	1999年3月23日・1999年3月30日
遺跡所在地	山梨県東八代郡一宮町
1/25000地図名・位置	石和
概要	主な時代 古墳時代後期・平安時代
	主な遺構 後期古墳5基(四ツ塚古墳群)、石積み遺構28基(西林遺跡)
	主な遺物 土器部(奈良・平安時代)、玉類(勾玉・水晶製切子玉・ガラス玉)、刀装具、鐵鎌
調査期間	1995年5月10日～6月10日(南西田遺跡) 1995年8月21日～8月31日(西林遺跡) 1995年8月28日～12月12日(四ツ塚古墳群)

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第162集

四ツ塚古墳群・南西田遺跡・西林遺跡

印刷日 1999年3月23日
発行日 1999年3月30日
編集 山梨県埋蔵文化財センター
発行 山梨県教育委員会
印刷 横河グラフィックアーツ株式会社
甲府市高室町155 横河電機(株)甲府事業所内
TEL 055-243-0548
URL:<http://www.yokogawa.co.jp/YGA/>

